

Fig. 246 SX01 中央部 出土遺物 (39)

で耳部が波状である。1001～1005は壺類である。1001～1003は長頸壺と考えられる。1004形状は不明である。瓶の可能性も否定できない。1005は小型の壺と考えられるが詳細な器種は不明である。1006は甕の底部で外面にタタキ調整がなされる。

綠釉陶器 (Fig. 243) SX01 中央部では1007が出土しており、底部と体部の一部が残存している。

土師器 (Fig. 244～246) SX01より出土した1008～1064を示す。器種は壺、有台碗、有台皿、甕、鉢、傾、小型模造品、製塙器など出土している。1008は内外面に赤彩が施されている有台碗である。1009は有台皿である。1010～1019は壺である。1010・1011は体部から口縁部の立ち上がりがやや垂直に近い形状であり、古手の様相を示す壺である。内外面ともに赤彩が施される。1012～1015

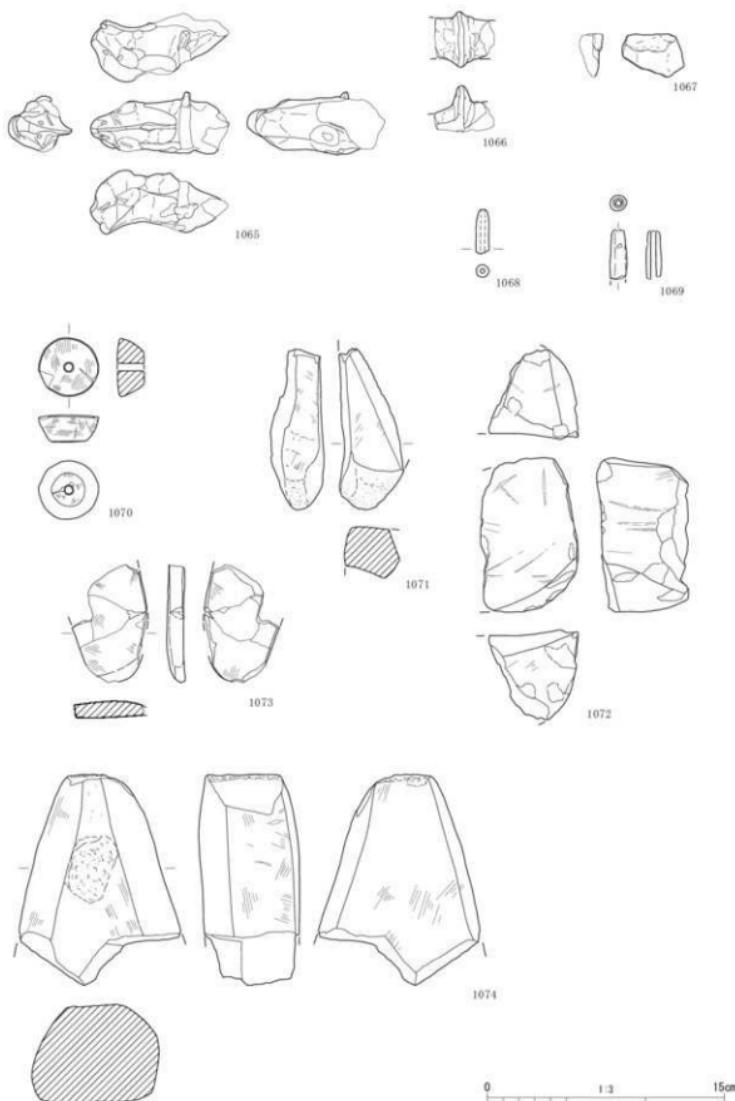


Fig. 247 SX01 中央部 出土遺物 (40)

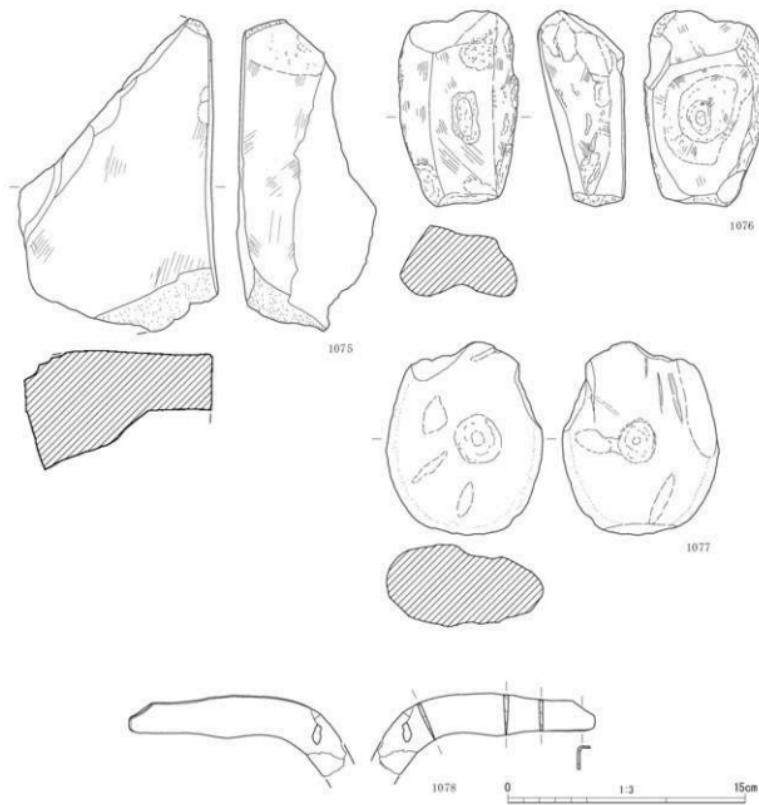


Fig. 248 SX01 中央部 出土遺物 (41)

は内外面に赤彩が施されている。1014は内面のみ赤彩が施される。1020は蓋の口縁部と考えられ、V層からの混入品と推定される。1021～1034は甌である。1021～1025は比較的体部が張る形状であるが、1026～1034は体部が張らない形状である。1035は把手付鉢である。1036は瓶で、内外面ともにハケメ調整がなされる。1037～1048は小型模造品である。1039はやや小型の壺である。1037～1044は碗形である。1045は鉢形、1046は甌形、1047・1048は底部が欠損しているが瓶形と考えられる。1389～1061は製塙土器である。1055は口縁部が外反する形状である。

土製品 (Fig. 246～247) SX01 中央部より出土した 1062～1069 を示す。1062～1064は革袋形である。1065・1066は土馬である。1065は馬の頭部から鞍の前輪部分まで残存している。1066は鞍



Fig. 249 SX01 中央部 出土遺物 (42)

と考えられる一部が残存している。1067は土馬や土製支脚の一部と考えられるが詳細は不明である。1068・1069は土鍤である。

石製品 (Fig. 247・248) SX01 中央部より出土した 1070 ~ 1077 を示す。1070 は凝灰岩製の紡錘車である。

1071 ~ 1076 は砥石である。1071は砂岩製で砥面は2箇所残存している。1072は砂岩製で砥面は4箇所確認される。1073は凝灰岩製で砥面は2面確認される。1074は砂岩製で砥面が4箇所のほか、敲打痕が確認される。1075は砂岩製で砥面が2箇所残存している。1076は凝灰岩製で砥面のほか、

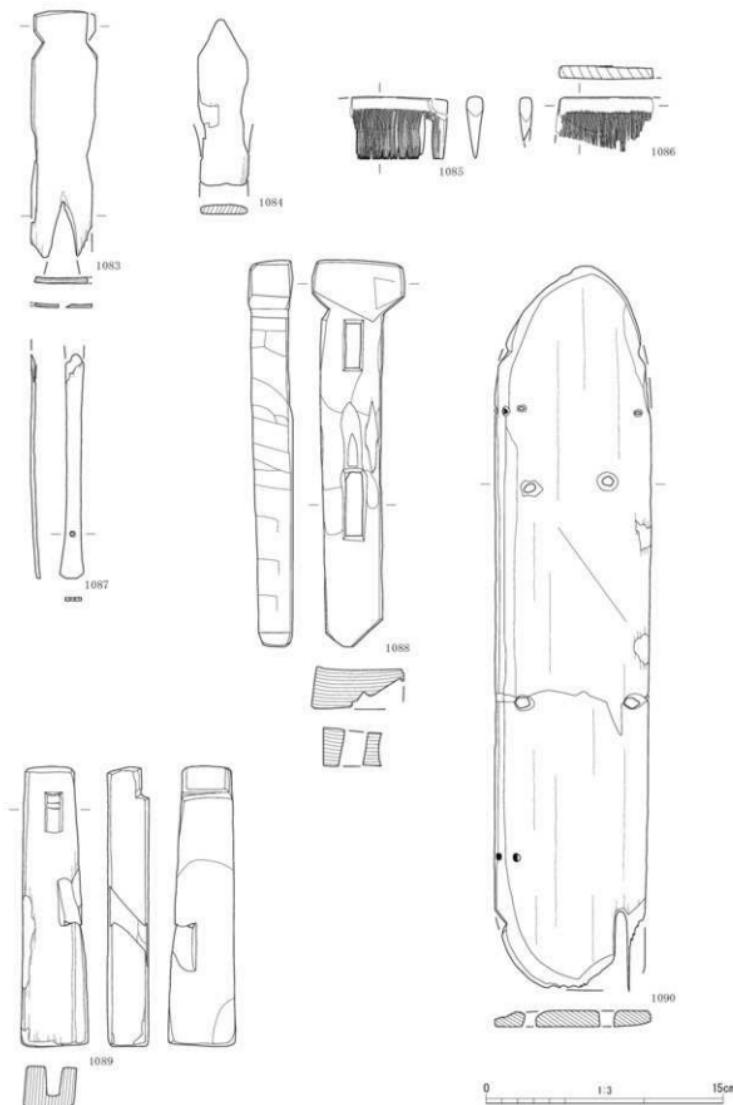


Fig. 250 SX01 中央部 出土遺物 (43)

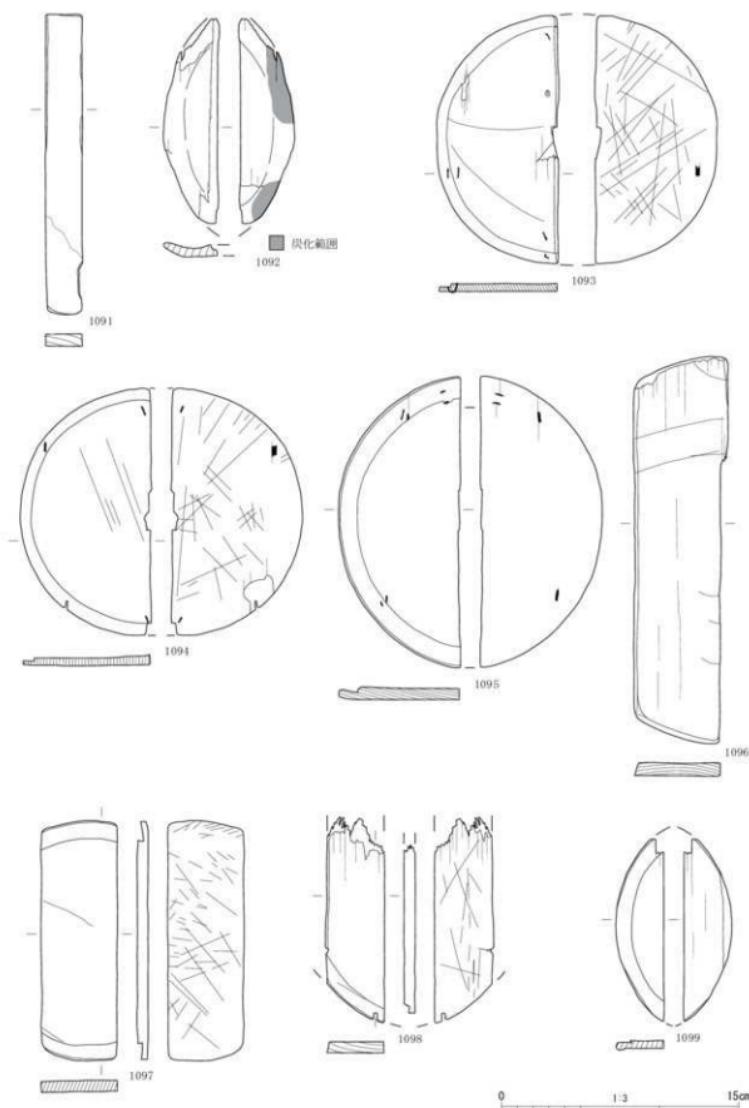


Fig. 251 SX01 中央部 出土遺物 (44)

6 伊場大溝IV層の調査

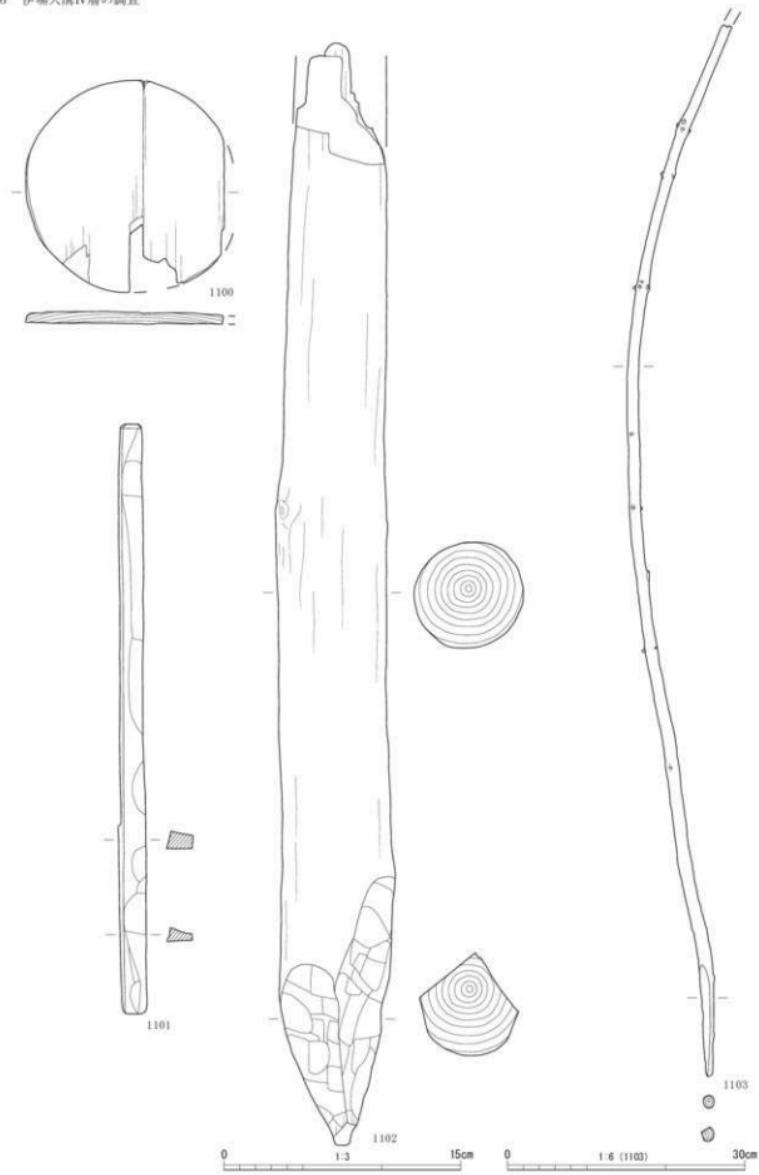


Fig. 252 SX01 中央部 出土遺物 (45)

敲打による凹みが2箇所確認される。1077は安山岩製の凹石である。敲打による凹みが2箇所確認される。

金属製品 (Fig. 248) SX01中央部より1078の1点が出土している。1078は鉄製の鎌刀で、基部が斜めに折り曲げられている。

木簡 (Fig. 249) SX01中央部より4点出土している。V層で出土した木簡と同じく発見順で番号を付与した。1079を20号木簡、1080を21号木簡、1081を24号木簡、1082を32号木簡とした。第4章で詳述するためここでは概要を記述する。

1079は上部が山形の形状で、中央部が欠損している。「以今月二月」など文字は比較的明瞭に確認できるが、中央部の欠損により間の文字は不明である。1080は「延喜十三年」が記述されている紀年銘入り木簡である。厚さ1.3cmで側面にも記述がなされている。1081は表裏両面に文字が確認される。表面には「召稻主」などの文字が記述されている。1082は曲物底板中央に「足」が刻書されている。

木製品 (Fig. 250～252) SX01中央部より出土した2083～1103を示す。器種は、人形、斎串、櫛、曲物、杭、その他加工材が出土している。

1083は人形で、下部が欠損している。1084は斎串で下部が欠損している。1085・1086は櫛で完形ではないが残存状態は良好である。1087は扇の歯と考えられ、下部に穿孔がみられる。1088～1091は加工材、または加工板である。1088は上部が両側面に突出する形状で2箇所ホゾ穴と考えられる方形の孔が開けられている。1089は上部に方形の抉りが、側面に斜めに抉られた構が確認される。1090は曲物の底板を転用した加工板である。二次加工による穿孔が6箇所確認される。1091は長方形の加工板である。1092は皿である。欠損により製作技法は不明である。1093～1100は曲物の底板である。1101は加工棒である。1102は杭である。1103は先端を加工した杭状の木製品である。土留や木柱の用途ではなく、目印としての杭であった可能性がある。

③ SX01 東部

墨書き土器 (Fig. 253～256) 須恵器、灰釉陶器、土師器ごとに分け、文字でまとめて遺物を掲載している。須恵器、灰釉陶器、土師器に墨書きが記されている。西部・中央部に比べると出土数は減少する。墨書きは「得」や「足」などの1文字墨書きが大半を占める。

1104～1114は須恵器に墨書きが記されている。1104は箱坏の底部に「栗原驛」、「山」が記されている。栗原驛は伊場遺跡群周辺に存在したと推定される駅家で、今までの推定を裏付ける資料となる。1105は平頂蓋に文字が記されているが判読はできなかった。1106・1107は有台碗に「太」が記されている。1106は底部に、1107は体部と底部にそれぞれ記されている。1108は有台皿で、底部に「太」が記されている。1109は糸切碗で底部に「太」が記されている。1112は有台碗で内面に「足」が記されている。1110～1114は箱坏の底部に文字が記されているが明確に判読できない。1111は欠損により不明瞭であるが「印」の可能性がある。1114は判読が困難であるが「常」と考えられる。1113は有台碗の底部に記号が記されている。

1115～1128は灰釉陶器に墨書きが記されている。1115～1117は碗の体部に「得」が記されている。1118～1122は碗に「足」が記されている。1118～1120は体部に、1121は体部及び底部に、

6 伊場大溝IV層の調査

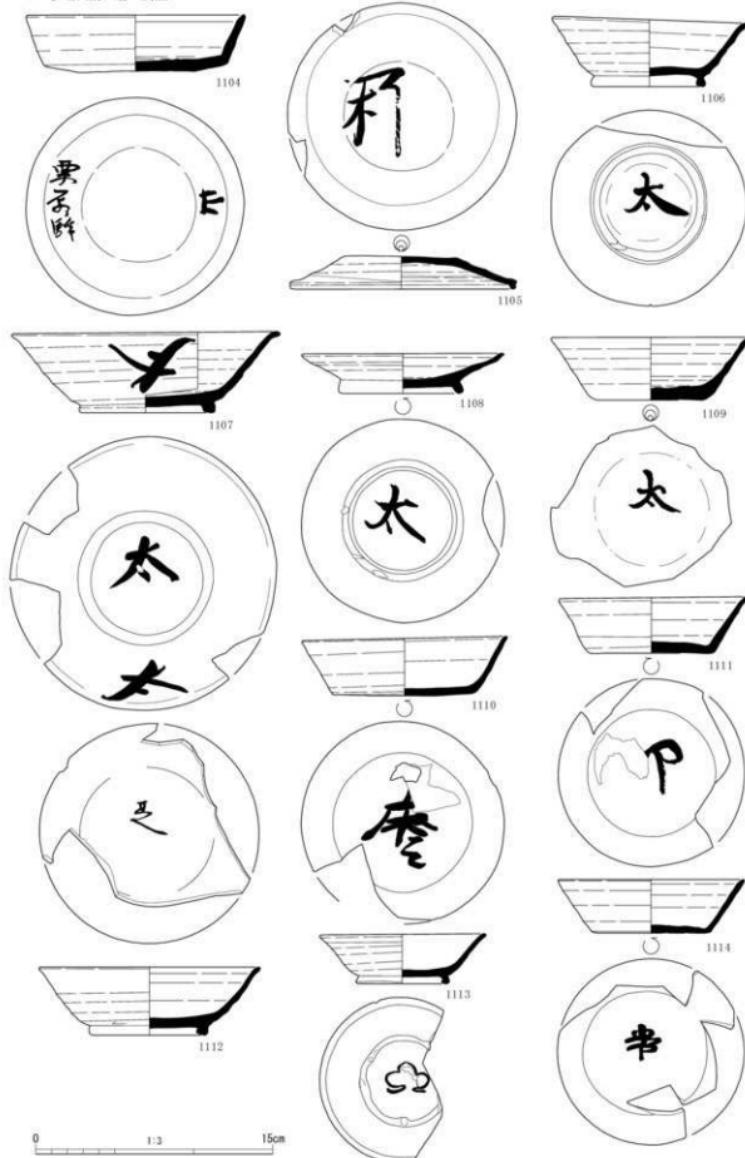


Fig. 253 SX01 東部 出土遺物 (1)

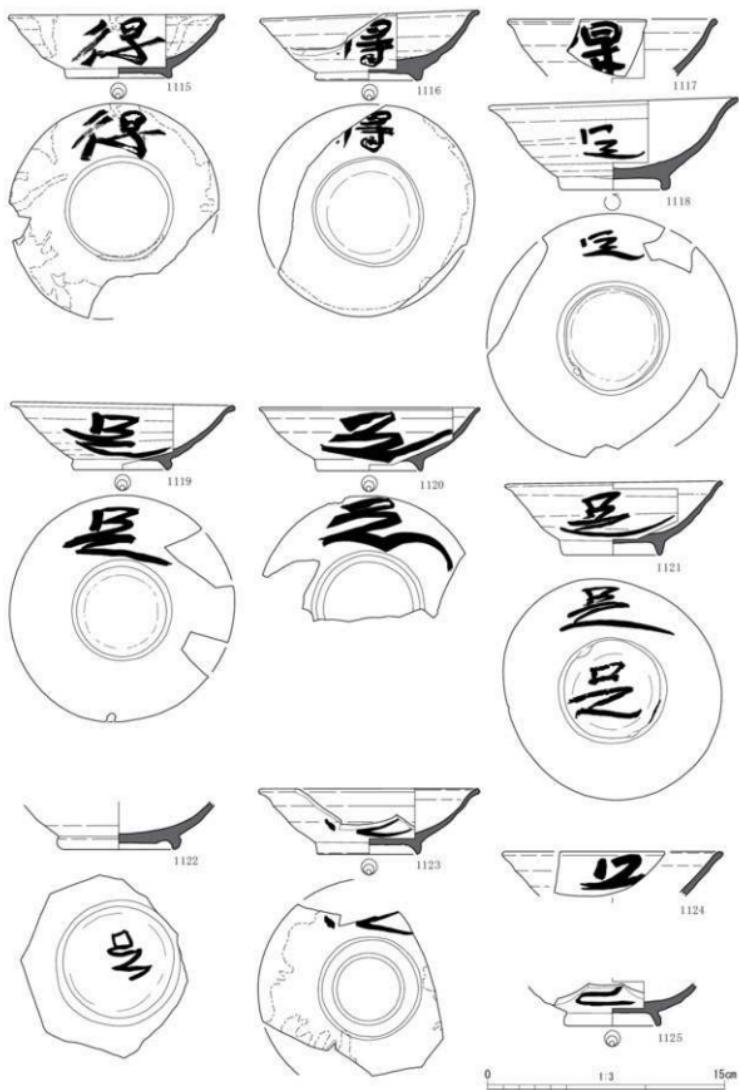


Fig. 254 SX01 東部 出土遺物 (2)

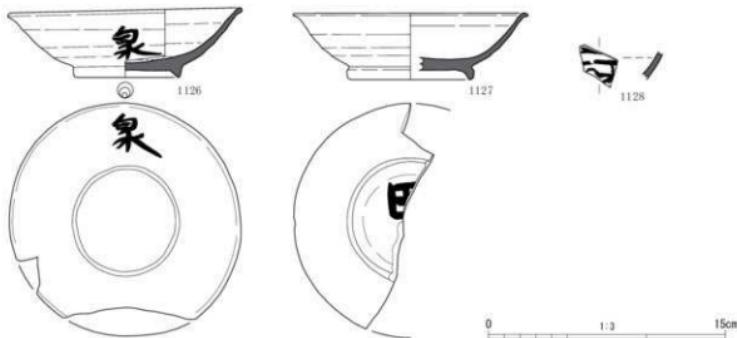


Fig. 255 SX01 東部 出土遺物 (3)

1122は底部にそれぞれ記されている。1123・1124は欠損により不明瞭であるが、碗の体部に「足」と考えられる文字が記されている。1125は欠損により判読は困難であるが「足」の可能性がある。1126は碗の体部に「泉」が記されている。1127～1128は欠損により判読できなかった。

1129～1139は土師器に墨書が記されている。1129は有台碗の底部に「太」が記されている。1130は残存する形状から有台皿と考えられる。底部に「太」が記されている。1131～1132は壺の底部にそれぞれ墨書が記されている。1132は「富」、1133は「印」、1134は「足」と考えられる文字が、1135は「安」が、1136は「印」に墨書がそれぞれ記されている。1137～1139は壺の破片と考えられ、それぞれ文字が記されている。1137は「足」と考えられる文字が、1138は「常」、1139は判読できない。

須恵器 (Fig. 257・258) SX01 東部より出土した 1140～1159 を示す。器種は壺蓋類のほか、壺類、甕が出土している。

1140・1141は摘蓋である。1141は摘み部が高い形状であり新手の様相を示す。1142は平頂蓋である。形状からみると 9 世紀前半に位置づけられるであろう。1143は有台碗である。1144～1148は箱壺である。1147・1148は糸切痕がみられ、新手の様相を示す。1149～1151は皿である。1150は欠損により不明瞭であるが、ヘラ記号が確認される。

1152～1158は壺類である。1152は広口壺で、体部に補修痕とみられる痕跡が残る。1153～1156は長頸壺である。1153は肩部が張り出し屈曲する形状である。1154は長頸壺の口縁部である。1155・1156は口縁部が欠損している。肩部が張り出し屈曲する形状である。1157は短頸壺である。外面体部にタタキ調整がなされている。1158は小型の壺である。1159は甕である。外面体部にはタタキ調整がなされており内面体部に同心円状の当て具痕が確認される。

灰釉陶器 (Fig. 259) SX01 東部より出土した 1160～1175 を示す。器種は、碗、長頸壺が出土している。

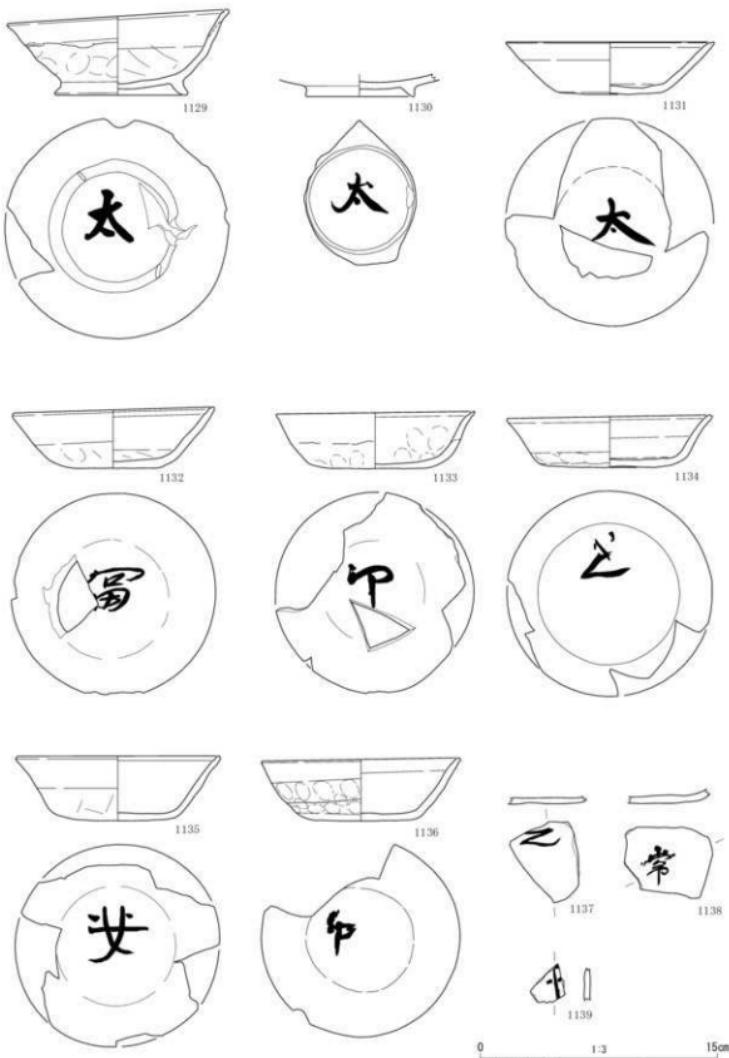


Fig. 256 SX01 東部 出土遺物 (4)

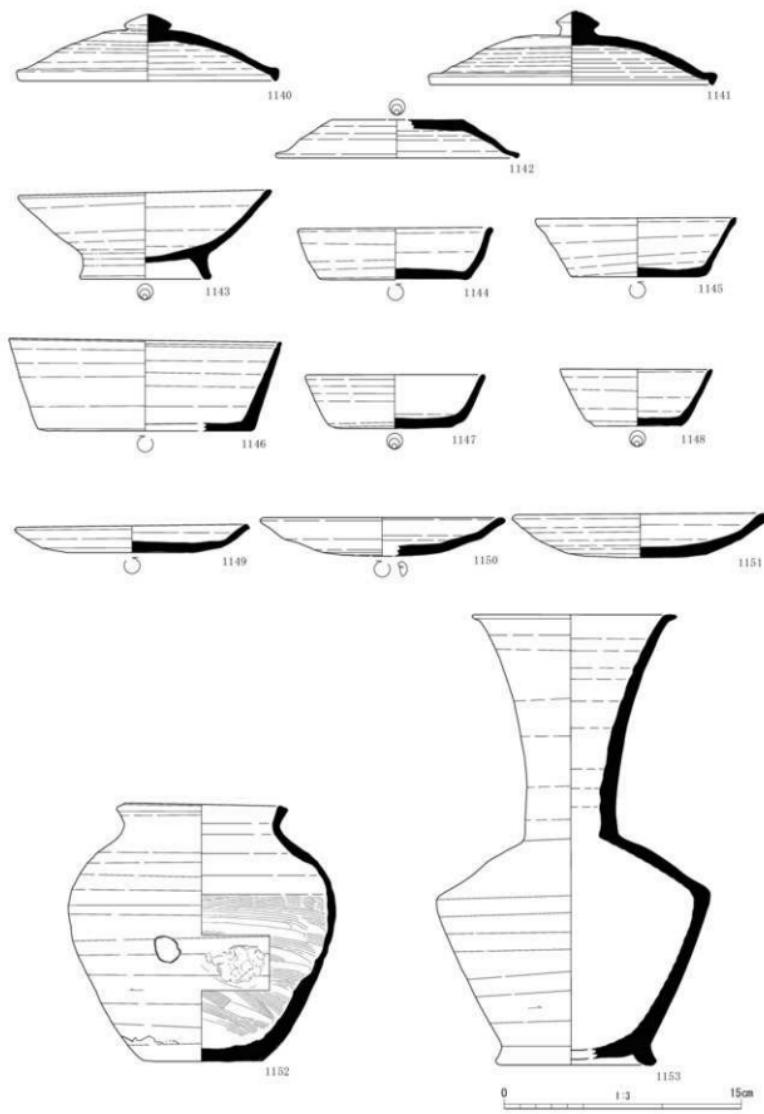


Fig. 257 SX01 東部 出土遺物 (5)

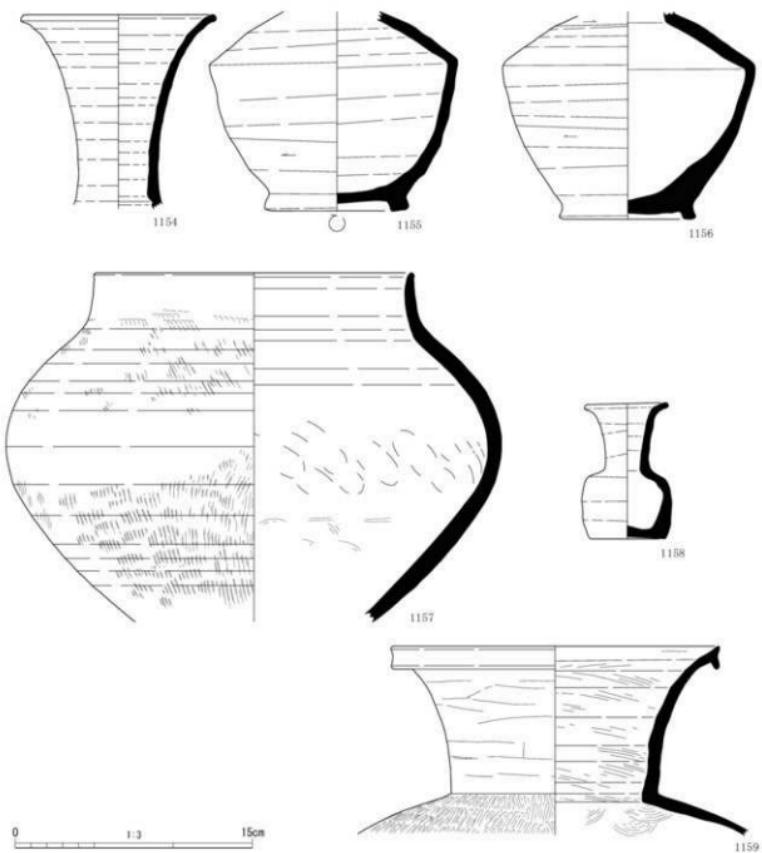


Fig. 258 SX01 東部 出土遺物 (6)

1160～1172は碗である。施釉方法はハケヌリやツケガケが確認される。底部は糸切痕が確認される個体が多い。1173・1174は無台碗で、底部は糸切未調整である。1175は長頸壺である。肩部は丸みを帯びた形状である。

土師器 (Fig. 260) SX01 東部より出土した 1176～1198 を示す。器種は、坏蓋、有台皿、坏、壺、甕が出土している。

1176は蓋で外面は赤彩が施される。8世紀後葉～9世紀初頭に位置すると考えられる。1177は有台皿で、体部から口縁部にかけて残存する。内外面ともに赤彩が施される。1178～1191は坏で

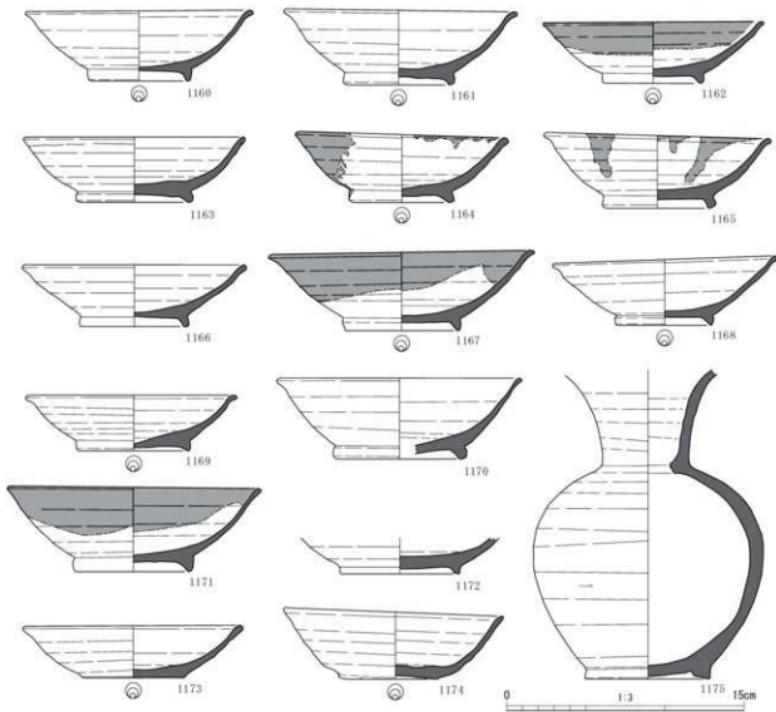


Fig. 259 SX01 東部 出土遺物 (7)

ある。1178は外面上半と内面全面に赤彩が施される。1179・1180、1183～1186は内外面ともに赤彩が施される。1182は外面上部と内面全体に、1187は内面のみ赤彩が施される。1189は外面底部および内面底部に不規則な線刻がみられる。

1192は壺である。形状から古手の様相を示すためV層からの混入品と考えられる。1193～1196は甕である。1193は外面体部にハケメ調整が施され、内面は板ナデが確認される。1194・1195は甕の口縁部である。1196は体部上半から口縁部が残存しており、鉢形に体部が広がり口縁部が外反する形状である。1197は口縁部が欠損しているため不明瞭であるが瓶形と考えられる。小型の把手付碗可能性もある。1198は製塩土器である。

土製品 (Fig. 261) SX01 東部からは 1 点出土している。1199は土馬の尾と考えられる。

石製品 (Fig. 261) SX01 東部からは 3 点出土している。1200は凝灰岩製の砥石で、砥面が 2箇所ほど確認される。1201は粘板岩製の不明石製品である。砥面がみられるため砥石の可能性がある。

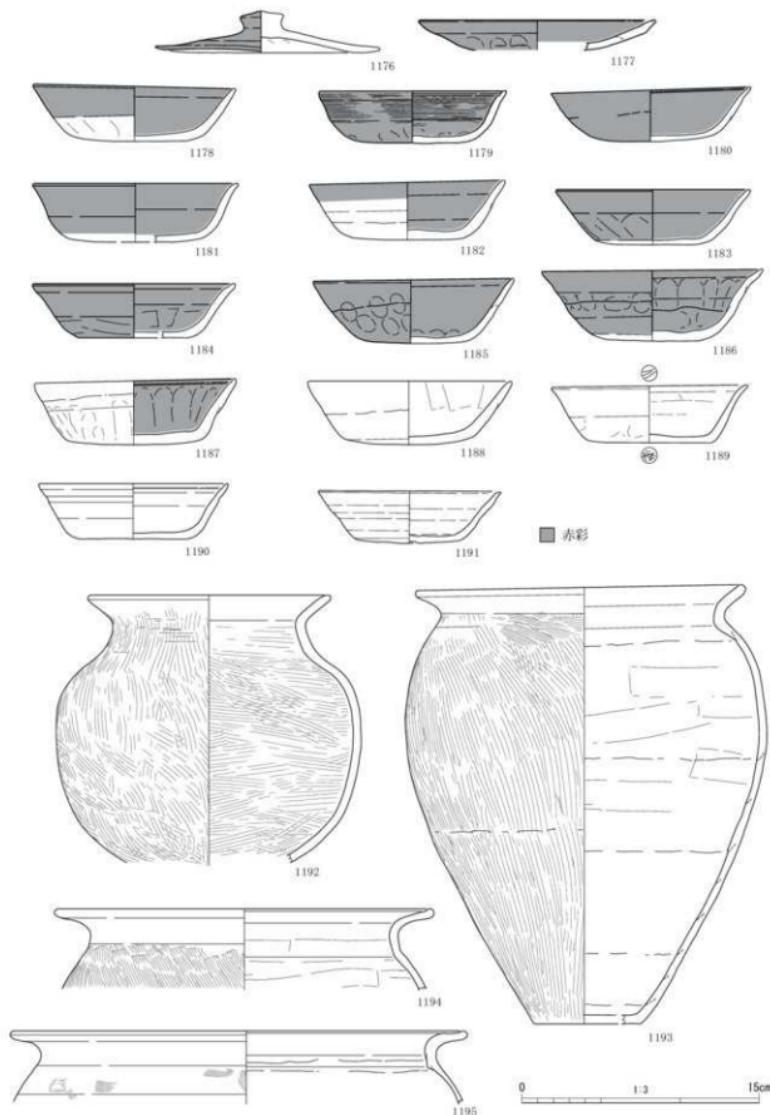


Fig. 260 SX01 東部 出土遺物 (8)

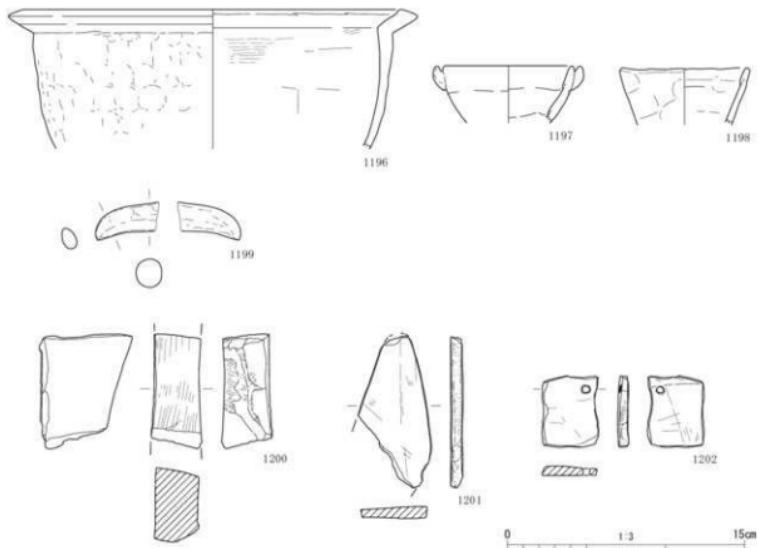


Fig. 261 SX01 東部 出土遺物 (9)

1202は粘板岩製の有孔砥石である。穿孔が1箇所確認される。

木製品 (Fig. 262 ~ 265) SX01 東部より出土した 1203 ~ 1221 を示す。器種は、斎串、舟形、横槌、柄、鍔、曲物、そのほか加工板、加工棒が出土している。

1203・1204は斎串である。1203は両側面からの削り出しの痕跡は確認できが削り出された部分は欠損している。1205は舟形である。内部が方形状にくり抜かれ、上下端部は段差が削り出されている。1206・1207は横槌である。1207は身の部分に使用痕と考えられる痕跡が確認される。裏面が全体に渡り欠損しており、炭化している。1208は斧柄である。1209は鎌柄である。柄尻にすべり止めである山形の突起が削り出される。柄上部は欠損により不明瞭であるが、鎌刃基部を差し込むためと考えられる孔があったと推定される。上部の残存部では穿孔が確認される。1210は鍔である。中央部に2箇所方形の孔が確認される。1211は用途不明の有孔加工板である。中央部に斜めの穿孔が確認される。1212は用途不明の加工板である。天板と推定される部材の一部に二次転用を目的とした切り出し途中の加工が確認される。1213は有孔加工棒である。上部に穿孔が確認される。1214は加工棒である。下部がヘラ状に削り出される。1215は加工板である。側面にL字状に加工される。1216~1219は曲物である。1216・1217・1219は曲物の底板である。1219は二次加工と考えられる穿孔が3箇所みられるため転用された可能性がある。1218は曲物の側板である。1220・1221は加工棒である。1220は断面形が方形状に切り出され上部に抉りが確認される。1221は円形状に加工される。

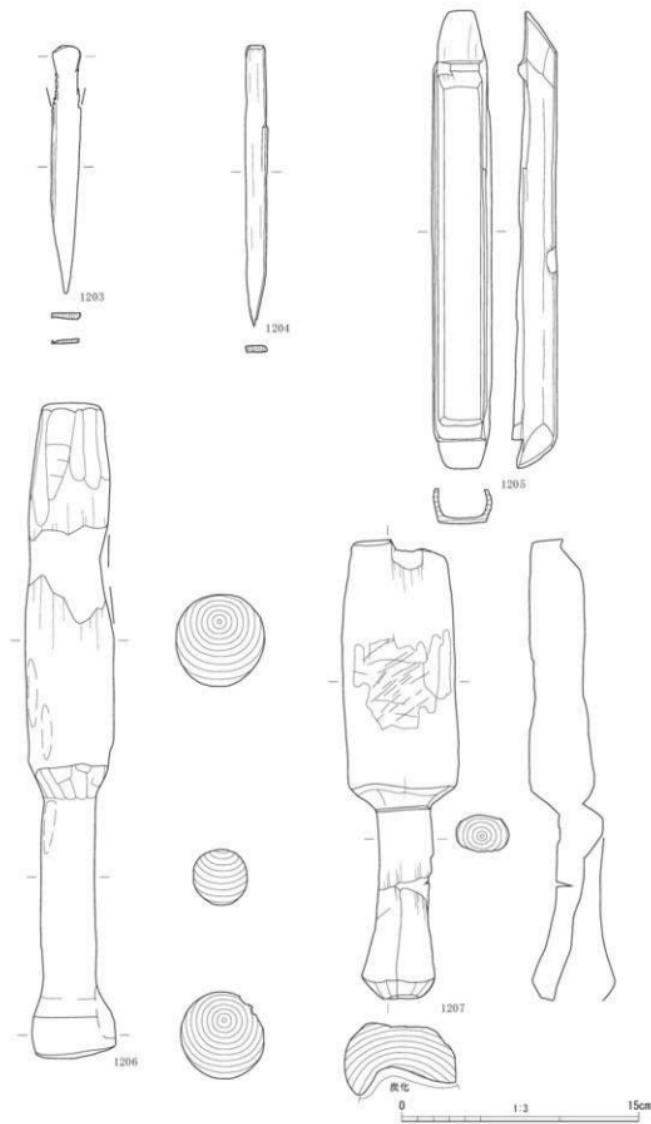


Fig. 262 SX01 東部 出土遺物 (10)

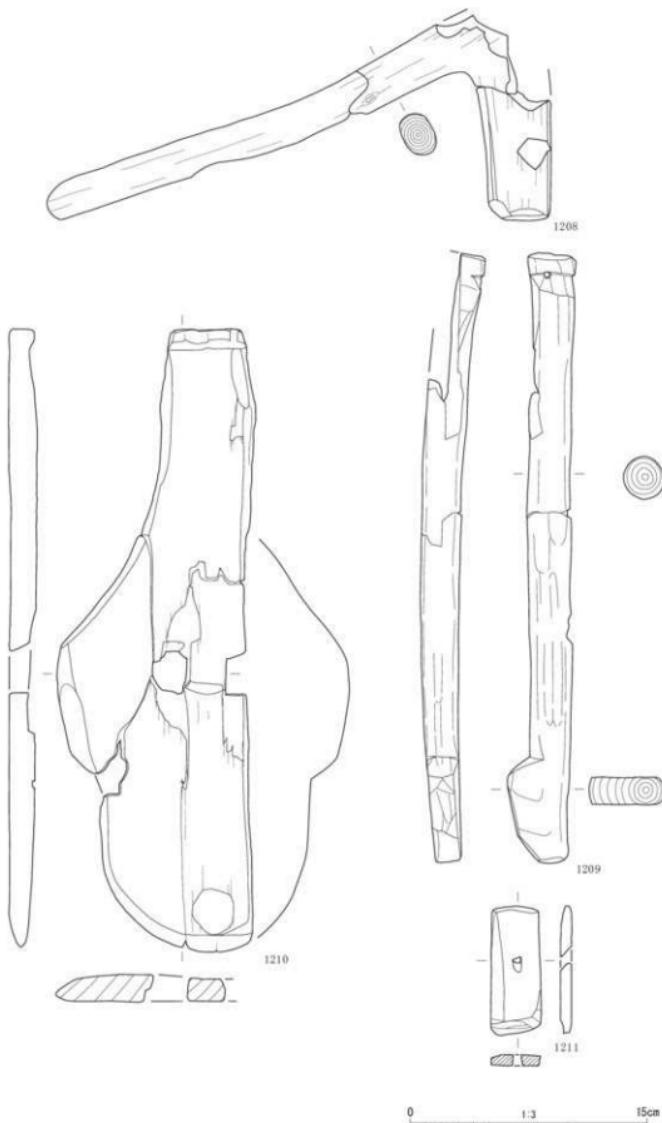


Fig. 263 SX01 東部 出土遺物 (11)

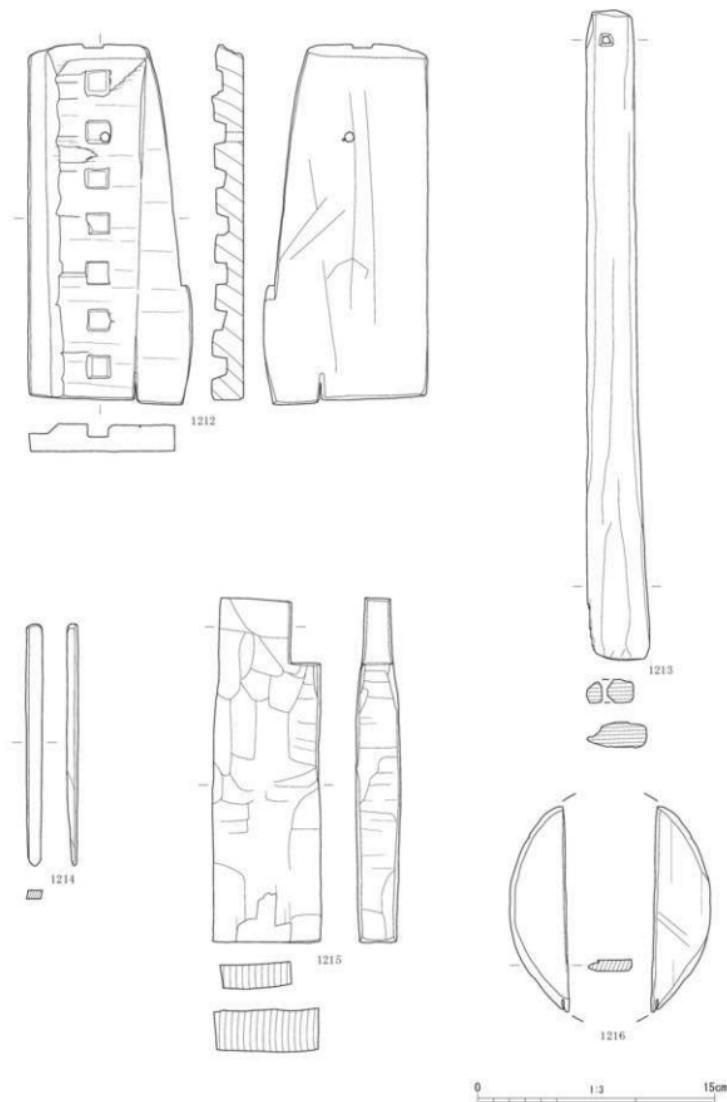


Fig. 264 SX01 東部 出土遺物 (12)

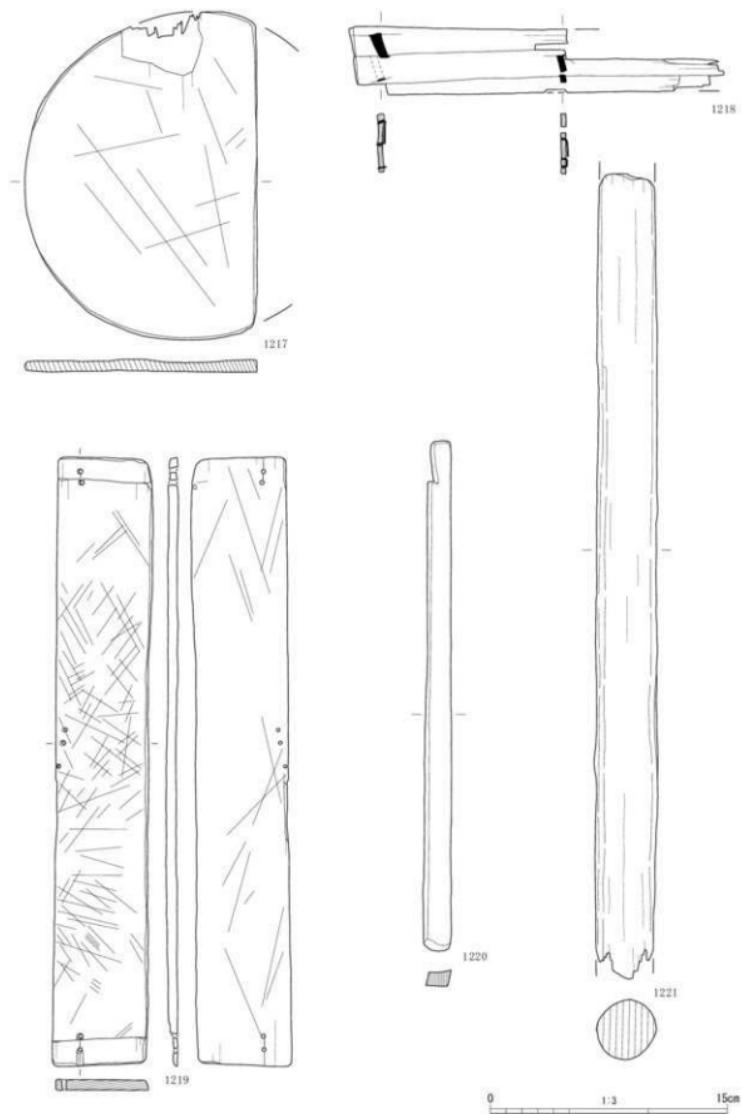


Fig. 265 SX01 東部 出土遺物 (13)

(5) 杭列状遺構

SX02 (Fig. 266) 調査区北西の大溝に直交する位置で杭列を検出した。また、杭列の下流に構造材と推定される丸木材が検出される。杭列は杭のサイズが不均一で根入れが浅い杭が多いこと、杭が不規則に打ち込まれていることから棧橋などの上部構造を持つ構造物の可能性は低い。ただし、北岸から南岸に至る約 11.4 m に渡り杭が打ち込まれており、大溝の下流に影響を及ぼすほどの構造物であることがうかがえる。

SX01 とほぼ同じ位置で検出されており、SX01 で出土している遺物が杭列を境に上流では密度が高く、下流では低くなる。SX01 で前述したとおり、東部では遺物の量が減少することからも裏付けられる。これらのことから杭列上流部を中心に遺物の投棄が行われていたことが推定される。

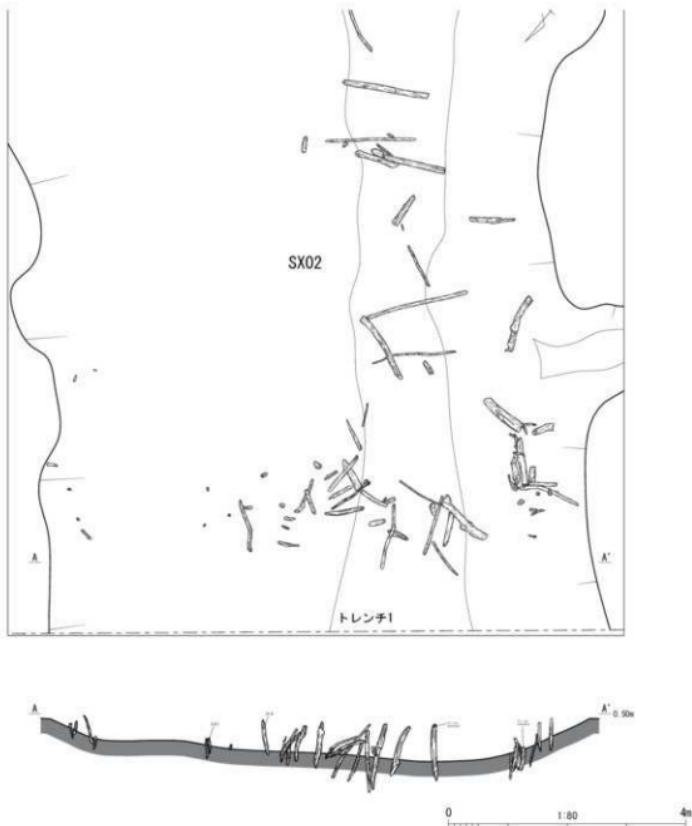


Fig. 266 SX02 実測図

(6) 貝塚

SS01 (Fig. 267 ~ 269) 調査区南東部、大溝最南端の南岸に位置する。長さ 5.20 m、幅 2.18 m で南岸から大溝底部にかけて不整な楕円形で広がる。貝層の厚さは約 39cm である。

遺物は、墨書土器、須恵器、土師器、土製品、木製品が出土している。IV層で検出された SX01 やほかの貝塚では灰釉陶器が多数出土しているのに対して、SS01 では出土しておらず、ほかの遺構とは一線を画す。また、「川辺古刀自女」と人名と考えられる墨書土器などがまとまって出土する。貝塚の形成時期は灰釉陶器が出土しないことと須恵器の形態から 8 世紀後葉と考えられ、ほかの貝塚よりも形成時期が古いと推定される。

1222 ~ 1229 は須恵器に墨書が記されている。1222 ~ 1224 は摘蓋である。1222・1223 は「川辺古刀自女」が記されている。1224 は摘部が高い形状で新手の様相を示す。内部に「竹田人万呂」が記されている。1225 は無台碗の体部に「富」と考えられる文字が記されている。1226・1227 は箱坏で、1226 は底部に×の記号と考えられる墨書が記されている。1227 は底部に墨書が記されているが判読できない。1228 は無台碗の底部に「子足人」が記されている。1229 は皿の底部に朱墨で「大」が記されている。1230 ~ 1240 は須恵器である。1230・1231 は摘蓋である。1232 ~ 1234 は箱坏である。1235 は高盤で脚部が欠損している。1236 ~ 1238 は無台碗である。1239 は糸切碗である。1240 は壺で体部上半から口縁部が欠損している。

1241・1242 は土師器である。1830・1829 は皿で内外面ともに赤彩が施される。1243 は陶質の土馬の脚部と考えられる。

1244 は木製品で舟形である。上下部に V 字状の抉りが確認される。

SS02 (Fig. 267・271) 調査区南東部、大溝南岸寄りに位置する。長さ 3.37 m、幅 2.36 m で形状は不整形である。貝層の厚さは約 19cm である。V 層中で検出された SS08 は SS02 の直下に位置する。

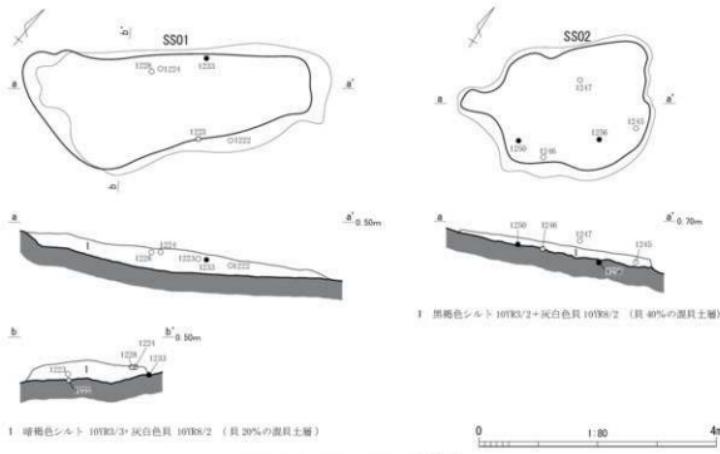


Fig. 267 SS01・SS02 実測図

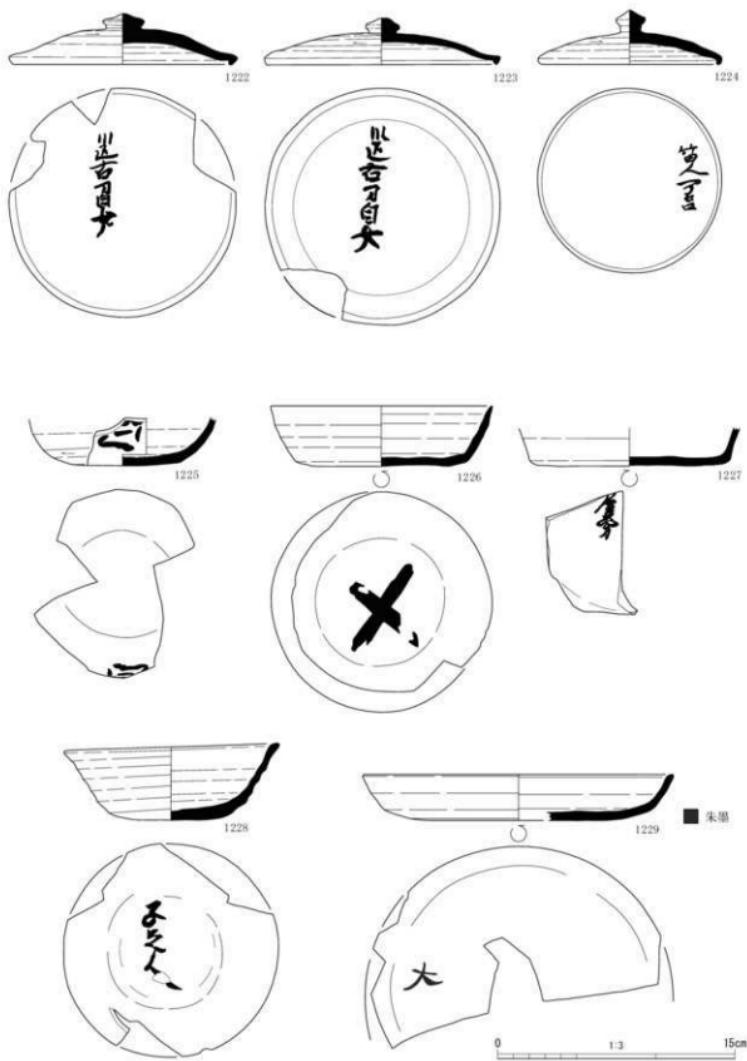


Fig. 268 SS01 出土遺物 (1)

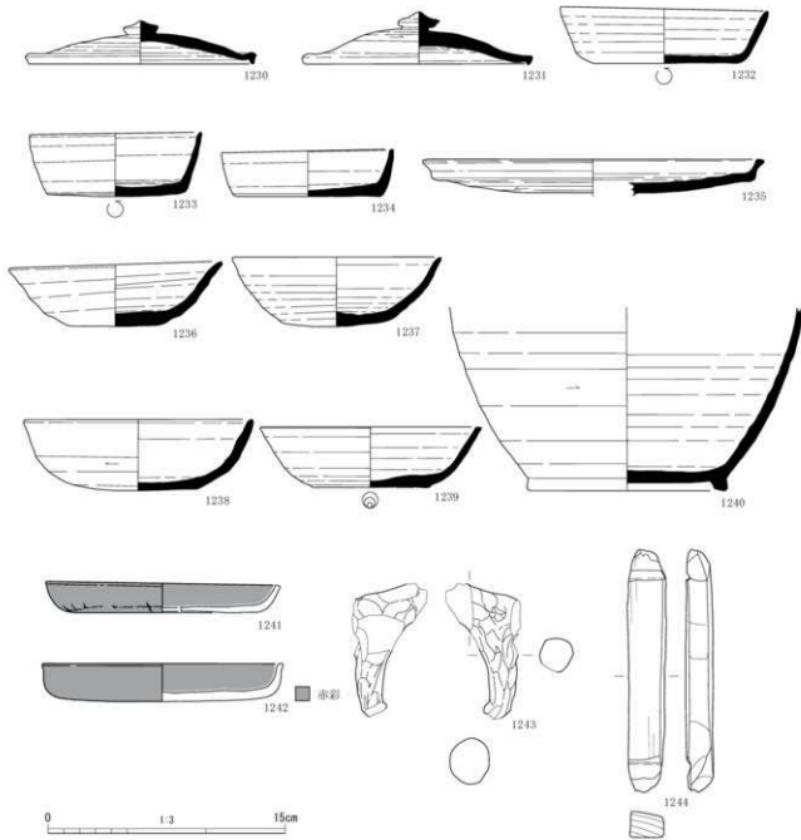


Fig. 269 SS01 出土遺物(2)

遺物は墨書き土器、須恵器、灰釉陶器、土師器、金属製品、木製品が出土している。

1245～1248は墨書き土器を示す。灰釉陶器のほか、土師器に墨書きが記されている。1245・1246は灰釉陶器の碗に墨書きが記されている。1245は底部に「足」が、1246は体部に2文字記されているが判読できない。1247は灰釉陶器の皿の底部に「足」が記されている。1248は土師器の坏で、底部に「加」が記されている。

1249・1250は須恵器である。1249は有台坏身、1784は無台碗である。

1251～1255は灰釉陶器の碗である。底部に糸切痕、ヘラケズリの痕跡がみられる。すべて無釉

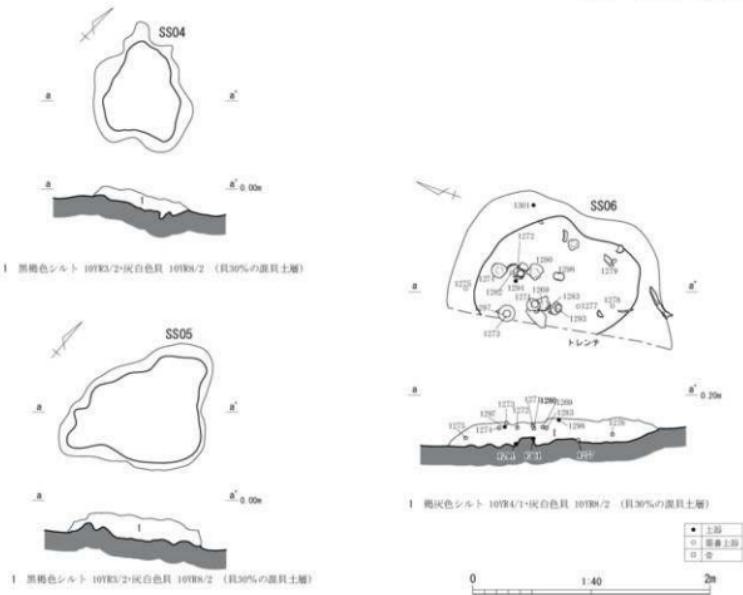


Fig. 270 SS04・SS05・SS06 実測図

である。1256は土師器の壺である。1257は鉄製の和釘である。木製品は2点出土しており、1258・1259とともに加工板である。

SS04 (Fig. 270・271) 調査区北西部のSX01 内で検出した貝塚である。長さ 1.10 m、幅 8.31 m で形状は不整形である。貝層の厚さは約 12cm である。隣接して SS05 が位置する。遺物は、灰釉陶器、製塩土器が出土している。

1260～1262は灰釉陶器の碗である。1262は墨書が記されているが欠損により判読はできない。
1263は製塙土器で口縁端部が内側に屈曲する形状である。

SS05 (Fig. 270・272) 調査区北西部のSX01 内で検出した貝塚である。長さ 1.39 m、幅 1.03 m で形状は不整形である。貝層の厚さは約 20cm である。隣接して SS04 が位置する。遺物は墨書き器、灰釉陶器が出土している。木製品は 1267 の加工棒が出土している。

1264～1266は灰釉陶器の碗である。1264は体部の2箇所に墨書が記されている。「足」のほか2文字が記されており、「万」のみ判読できる。1265は無釉であるが、1266の施釉方法はツケガケである。

SS06 (Fig. 270・273・274) 調査区北西部、大溝北西検出した貝塚である。長さ 1.94 m、幅 1.10 mで形状は不整形である。貝層の厚さは約 21cm である。SX01 で最も遺物の密度が高い位置で検出されているため、SS06 から多数の遺物が出土している。特に墨書き土器を多数含む。遺物は墨書き土器、灰陶器、土器、木製品が出土している。

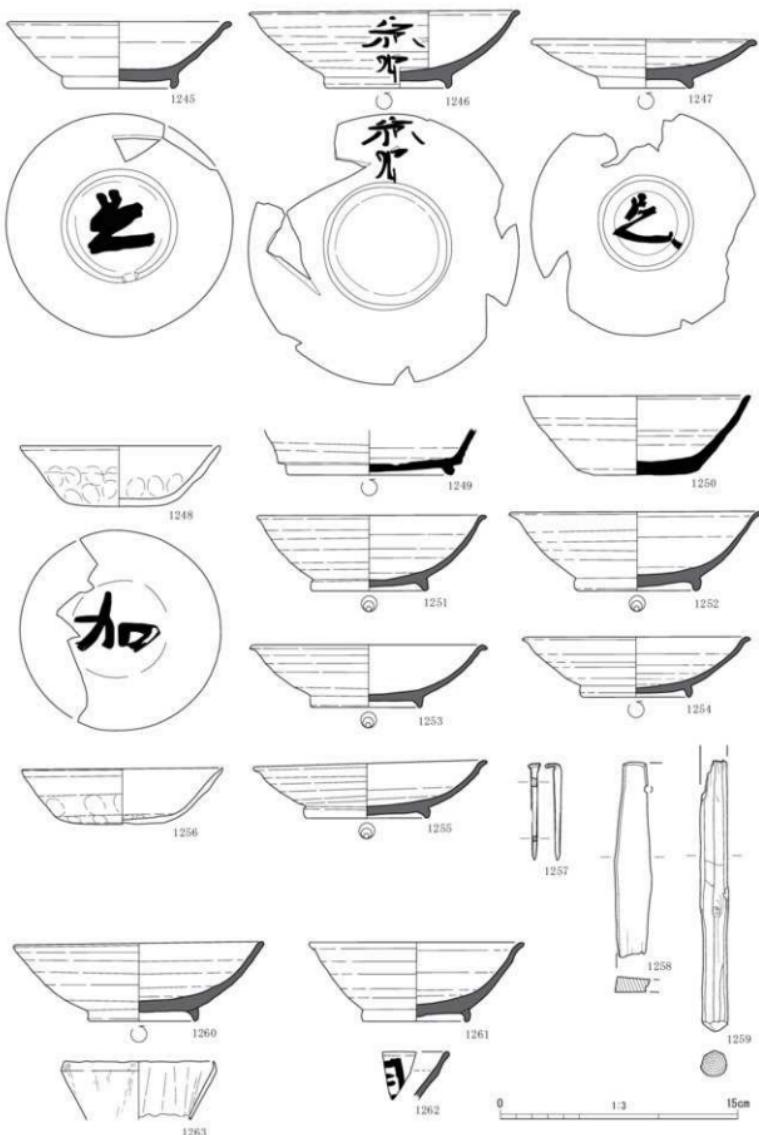


Fig. 271 SS02・SS04 出土遺物

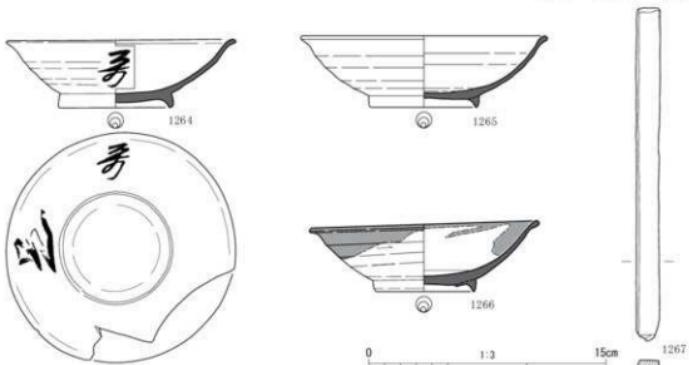


Fig. 272 SS05 出土遺物

1268～1290は灰釉陶器に墨書が記されている。1268は輪花碗の体部に「得上」が記されている。1269は碗の体部に「得上」が記されている。1270～1274は碗の体部に「得」が記されている。1271は体部に2箇所「得」が確認される。1275・1276は碗に「西」が記されている。1276は体部及び底部に「西」が記されている。1277は碗の体部に「仁」が、1278は碗の体部に「平」がそれぞれ記されている。1279は碗の体部に「卒」が記されている。1280は碗の体部及び底部に「六万」が、1281は体部に「加万」がそれぞれ記されている。1282は碗の体部に、3箇所朱墨で文字が記されているが判読できない。1283～1290は墨書が確認されるが、欠損により文字の判読が困難である。1287は欠損により不明瞭であるが「足」である。

1291～1302は灰釉陶器を示す。1291～1297は碗である。無軸、底部糸切りが多い傾向である。1298・1299は耳皿である。1298は無台の耳皿である。1302は甕である。底部が平底で体部外面にタタキ調整がなされる。内面には同心円状の当て具痕が確認される。

1303～1308は土師器である。1303～1307は甕である。1306・1307は体部が張り出さない形状である。1308は製塙土器の脚部である。木製品は1309が出土しており、楕円形の形状の加工板である。

(7) 枝溝

SD311 (Fig. 276～277) 調査区北西の大溝南岸に接続する。長さ10.66m、幅2.25m、深さ0.3m。堆積土は、2～3層、褐灰色～黒褐色に灰色系のブロックを含む。断面では、V層で検出されたSD313を切る検出状況を示す。

遺物は、墨書き土器、灰釉陶器、土師器、製塙土器、木製品が出土している。SX01に隣接しているためか多数の墨書き土器が出土している。

1310～1327は灰釉陶器に墨書が記されている。1310～1314は碗に「足」が記されている。1312は欠損により不明瞭であるが「足」と考えられる。1315は碗の外底部と内面に墨書が記されている。内面は「寺」と記されているが、外底部の文字は判読できなかった。SX01で出土し

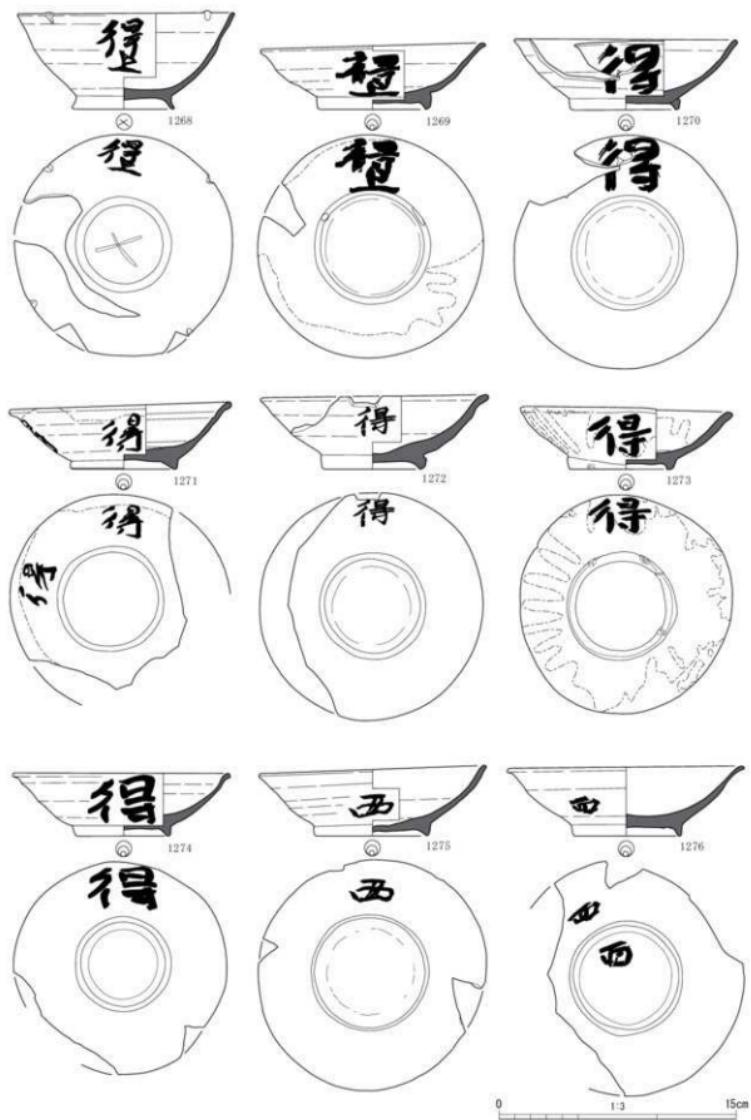


Fig. 273 SS06 出土遺物 (1)

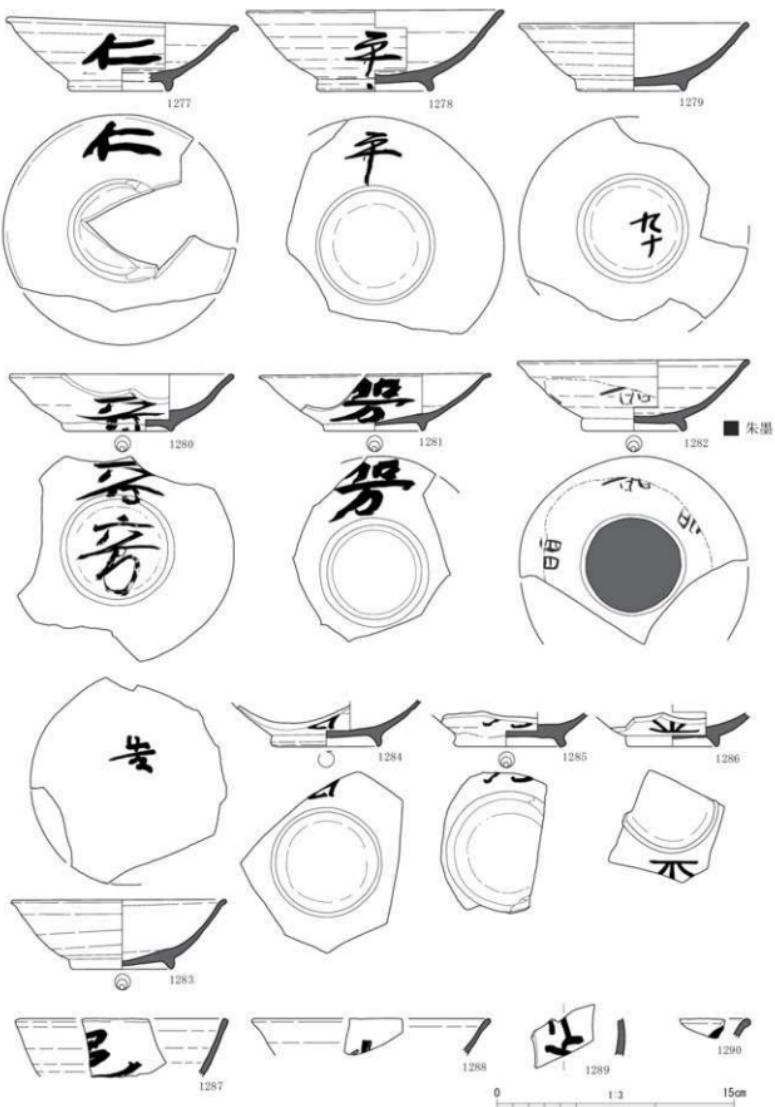


Fig. 274 SS06 出土遺物(2)

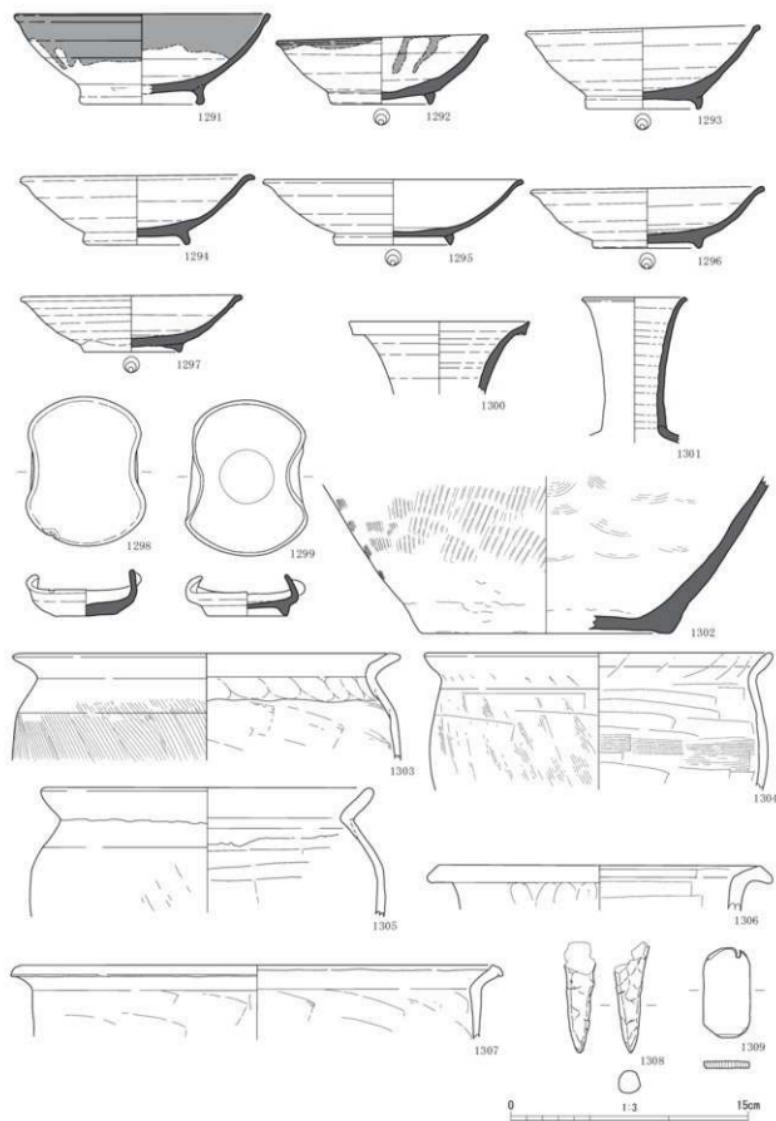


Fig. 275 SS06 出土遺物 (3)

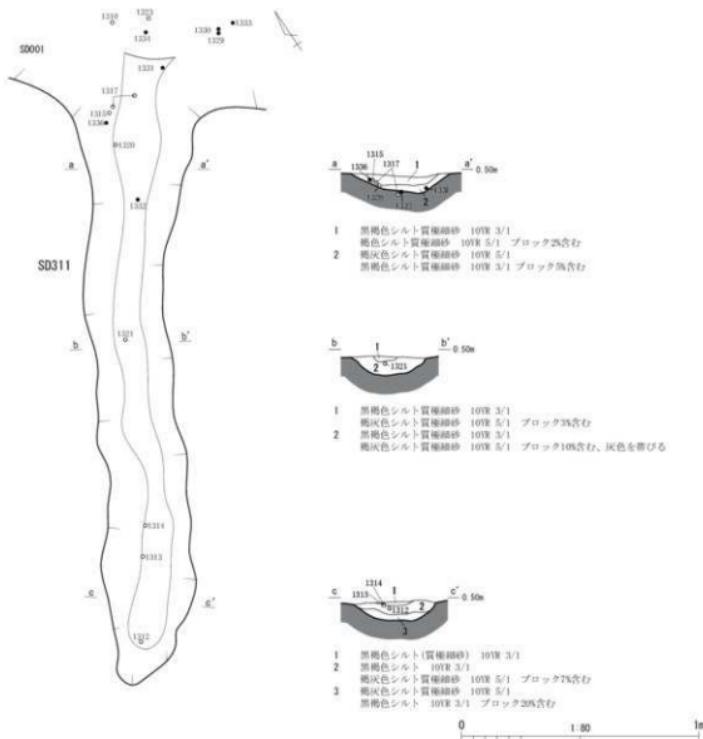


Fig. 276 SD311 実測図

た683と同様の形態で墨書が記されている。1316は碗の体部及び底部に「財入」が記されている。1317は碗の体部及び底部に「和」が記されている。1318は碗の体部に2箇所墨書が記されており、「得上」「足」がそれぞれ記されている。1319は碗の底部に「太」が記されている。1320～1326は文字が判読できなかった墨書き土器を示す。1322は欠損により不明瞭であるが「足」の可能性がある。1327は土師器の坏と考えられ、墨書が記されているが判読はできない。

1328～1335は灰釉陶器である。1328～1332は碗で、底部にハラケズリ、糸切痕や無釉のものも確認される。1333は輪花碗である。1334は無台碗、1335は無台皿である。1335は体部が屈曲する形状である。

1336～1345は土師器である。1336は硯の一部と考えられる。全体が黒色で、丁寧なミガキ調整が施される。1337は甕である。外面体部はハケメ調整がなされる。1338～1345は製塙土器である。

1346～1348は木製品である。1346は曲物で底板と側板の一部がともに出土している。1347是有孔板材で上下部に穿孔と切り込みが確認される。1348は加工板で一部炭化が確認される。

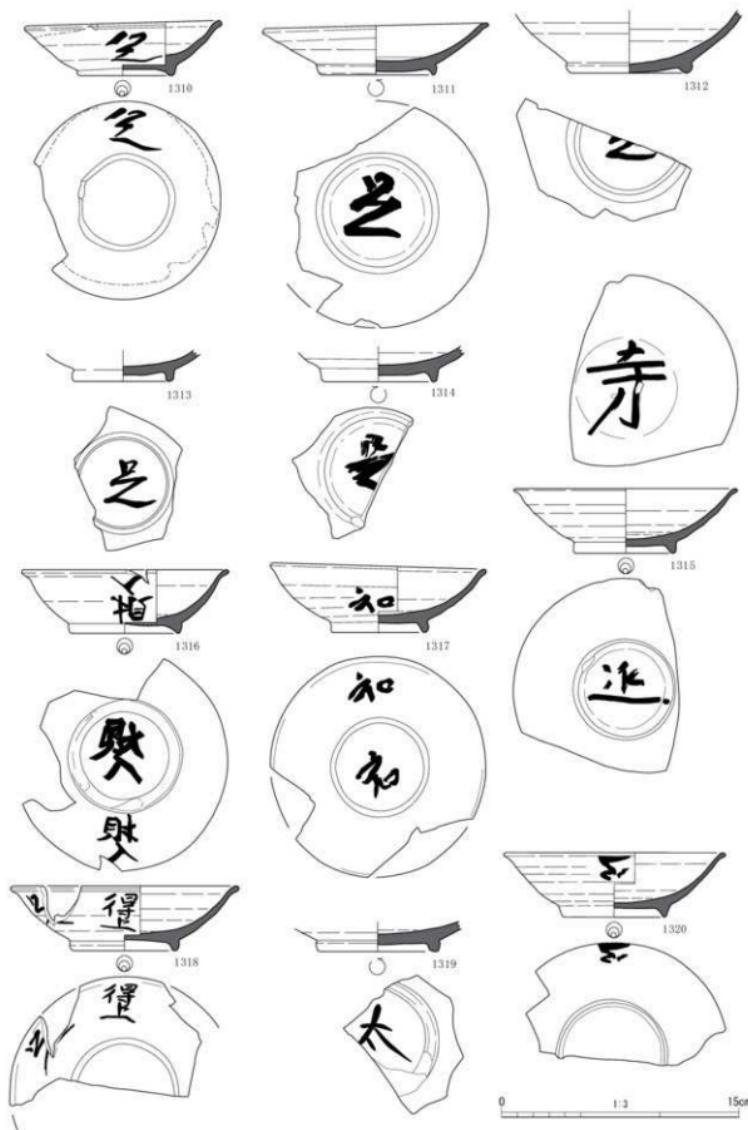


Fig. 277 SD311 出土遺物 (1)

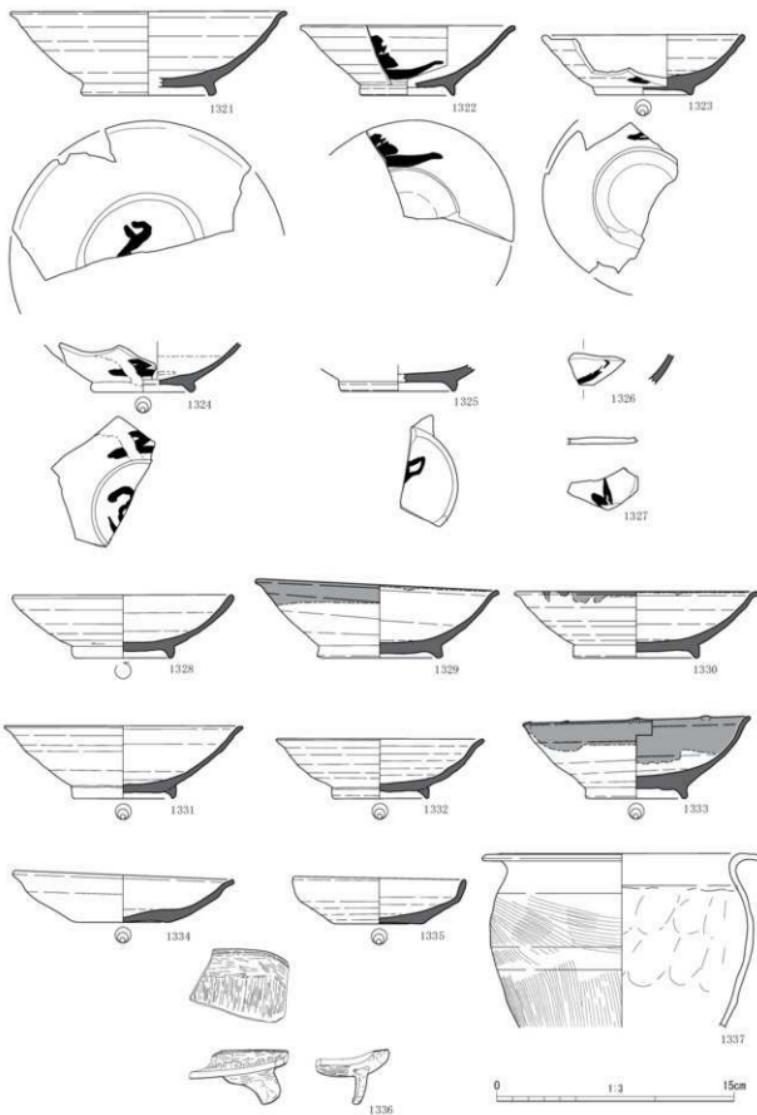


Fig. 278 SD311 出土遺物 (2)

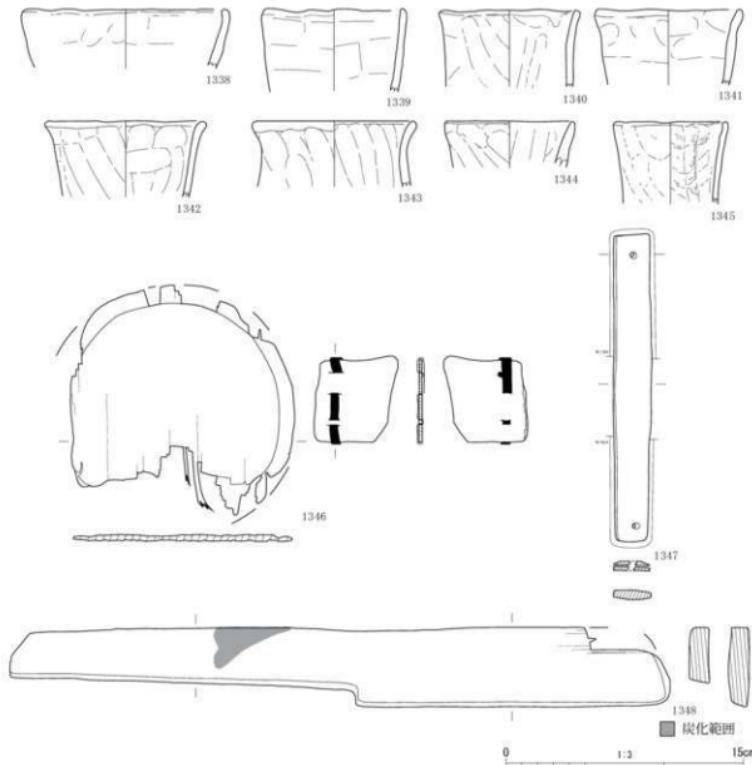


Fig. 279 SD311 出土遺物 (3)

(8) IV層出土遺物

概要 土器集積構造 (SX01) と貝塚 (SS01、SS02、SS04、SS05、SS06) を除くIV層中からの出土遺物を示す。須恵器、灰釉陶器、土師器が主体であるが、その中に墨書き土器が多数出土している。SX01と比較して、須恵器が割合として多い傾向であり、灰釉陶器はやや減少している。また、人面墨書きが確認される土師器の甕が出土している。木筒はSX01に近い位置で1点出土しており、SX01から流出したと考えられる。木製品も多数出土しており、人面墨書きが確認される人形や舟形、曲物など出土している。

墨書き土器 (Fig. 280～286) 1349～1419はIV層から出土した墨書き土器である。1349～1360は須恵器に、1361～1407は灰釉陶器に、1408～1419は土師器にそれぞれ墨書きが記されている。須恵器に記されている墨書きは人名と考えられる文字が確認される。灰釉陶器は、記されている墨書きの大半が1文字書きである。

1349～1360は須恵器に墨書が記されているものである。器種は摘蓋、盤、皿、糸切碗、箱坏、無台碗が出土している。

1349は摘蓋である。内面に人名と考えられる「川辺古刀自女」が記されている。1350は盤である。底部に欠損により不明瞭であるが3文字確認でき、「川前」が判読できる。1351・1352は皿で、1351は底部に欠損により不明瞭であるが2文字確認でき、「女」が判読できる。1352は底部に墨書が確認されるが文字の判読はできない。1353は平頂蓋の転用硯である。底部に欠損により不明瞭であるが「常」と考えられる。1354・1355は糸切碗である。1354は底部に「太」が記されている。1355は体部及び底部に「土」と考えられる文字が記されている。1356～1359は箱坏と考えられる。1356は底部に欠損により不明瞭であるが4文字確認でき、「部得女」が判読できる。1357～1359は欠損により判読は困難である。1360は無台碗で内面に5つの丸記号が並んで記されている。

1361～1407は灰釉陶器に墨書が記されているものである。器種は碗、皿、無台皿が出土している。1361・1362は碗の体部に「足」が記されている。1363～1367は碗の底部に「足」が記されている。1368は碗の体部及び底部に「足」が記されている。1369は碗の体部に墨書が記されており、欠損により不明瞭であるが「足」と考えられる。1370は碗の体部に墨書が記されている。「足」とも読み取れるが判然としない。1371は皿の底部に「足」が記されている。

1372～1374は碗の体部に「得」が記されている。1375～1380は碗の体部に「得上」が記されている。1381は碗の内面に「得上」が記されている。1382は碗の底部に「賀」が記されている。1383は皿で底部が高台より突出した形状である。体部に「賀」が記されている。1384は無台皿の体部と底部にかけて「賀」が記されている。1385・1386は碗の体部に墨書が記されており、1385は「寺」が、1386にも「寺」と考えられる文字が記されている。1387は碗の底部に「富」が記されている。1388は碗の底部に「甲」が記されている。1389は体部に「朋万」が記されている。1390は碗の底部に「夫」が記されている。1391は碗の体部に「有」が記されている。1392・1393は碗の体部に墨書が記されており、1392は「仁」が、1393は欠損により不明瞭であるが「仁」と考えられる文字が記されている。1394は碗の底部に「和」が記されている。1395～1397は碗の体部に文字が記されている。1395は「平」、1396は「上」、1397は「紀」がそれぞれ記されている。1398～1407は墨書が確認されるが文字が判然としないものを示す。1400は碗の底部に2文字確認され、「万」と考えられる文字が確認される。1405は欠損により不明瞭であるが碗の底部に「甲」と考えられる文字が確認される。

1408～1419は土師器に墨書が記されている。器種は有台碗、坏が出土している。

1408は有台碗である。内面全体に赤彩が施されており、外面底部に「和」が記されている。1409～1412は坏に「足」が記されている。1409は体部に、1410～1412は底部にそれぞれ記されている。1413は坏の体部及び底部に「仁」が記されている。1414は坏の体部に「木」が記されている。1415は坏の底部に「主」が記されている。1416～1419は坏に墨書が記されているが文字が判然としないものを示す。1417・1418は内面全体に赤彩が施される。1418は体部に墨書が記されておりかすれて不明瞭であるが「足」と考えられる。

須恵器 (Fig.287～290) 1420～1502はIV層から出土した須恵器である。器種は摘蓋、転用硯、

有台坏身、箱坏、無台碗、鉢、盤、皿、壺類、甕など出土している。

1420～1428は摘蓋である。1421は天井部にヘラ記号が確認される。1427・1428は内面全面に墨痕が確認されることから転用硯と考えられる。1429～1436は有台坏身である。1429は体部から口縁部にかけて碗形の形状をなす。1437～1465は箱坏である。1463は体部から口縁部に向かって広がる形状である。1466～1478は無台碗である。1466・1467は底部が平坦な形状である。1473は底部にヘラ記号が確認される。1477・1478は口縁端部が明瞭に外反する。

1479・1480は鉢である。1479はやや碗形の形状であり口縁端部が外反する。1481は盤である。1482～1484は皿である。1482は小型の皿と考えられる。1485～1487は高坏である。1487は低脚坏で脚部に4箇所穿孔が確認される。

1488～1498は壺類である。1488は広口壺である。1489～1496は長頸壺である。1489は無台でIV層中でも古手の様相を示す。1491・1492は肩部が屈曲する形状である。1497・1498は壺の底部で、1627は無台である。1499～1502は甕である。1499は外面に緻密なタタキ調整がなされており、内面上半には同心円状の当て具痕が確認される。1500は外面に緻密なタタキ調整が施されている。1501・1502は甕の口縁部である。

灰釉陶器 (Fig. 291) 1503～1522はIV層から出土した灰釉陶器である。器種は碗、皿、大碗、長頸壺が出土している。出土数はIV層で検出されたSX01よりも大幅に減少する。

1503～1516は碗である。底部はヘラケズリ、糸切痕が確認される。施釉が確認されるものは423の1点のみである。1517～1519は皿である。1520は有段皿である。内面に1段確認される。1521は口径が約24cmの大皿である。1522は長頸壺である。

土師器 (Fig. 292～294) 1565～1566はIV層から出土した土師器である。赤彩が施されている坏、皿が多数出土している。また、人面墨画が確認される甕が出土している。

1523～1532は坏である。1523・1523は内外面ともに赤彩が施されており、外面はミガキ調整がなされている。1523は内面に暗文が確認される。V層からの混入品、あるいはIV層でも古手である可能性がある。1526・1531は内面と体部から口縁部に赤彩が施される。1530・1532は内面に赤彩が施される。1533～1535は有台碗である。1533は外面にミガキ調整がなされている。底部に意図的に記されたと推定される円状の痕跡が確認される。1533・1534は形状から古手の様相を示す。1536は皿である。内外面ともに赤彩が施される。1537～1539は台付皿である。1537～1539は外面にミガキ調整が施されており、内面に暗文が確認される。1537には内外面ともに赤彩が施されている。1540は鉢で、内外面ともに赤彩が施される。1541～1546は甕である。1545は、短胴甕である。1546は甕の体部に人面墨画が記されている。残存部分で確認できる部位として両目、片耳、鼻、口及び鈍が確認できる。1547は碗に人面墨画と考えられる墨画が記されている。1548～1561は小型模造品である。1548～1557は碗形である。1558～1560は高坏形である。1561は壺形である。1562～1566は製塙土器である。1566は脚部である。

土製品 (Fig. 294) 1567・1568の2点を示す。1567は動物を模した形状で、胴体の一部と脚が残存している。伊場大溝での出土傾向から土馬と推定される。1568は尾と考えられる。

その他の遺物 (Fig. 294) 1569は安山岩製の敲石である。中央と側面全周に敲打痕が確認される。

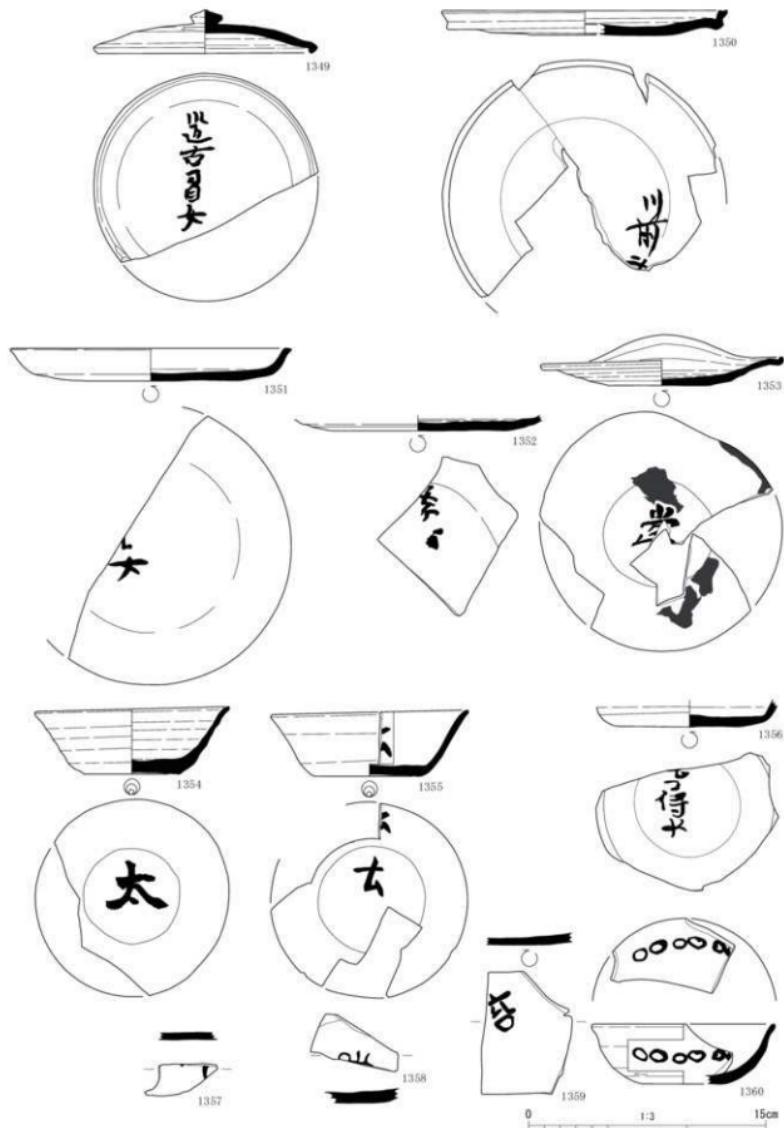


Fig. 280 IV層 出土遺物 (1)

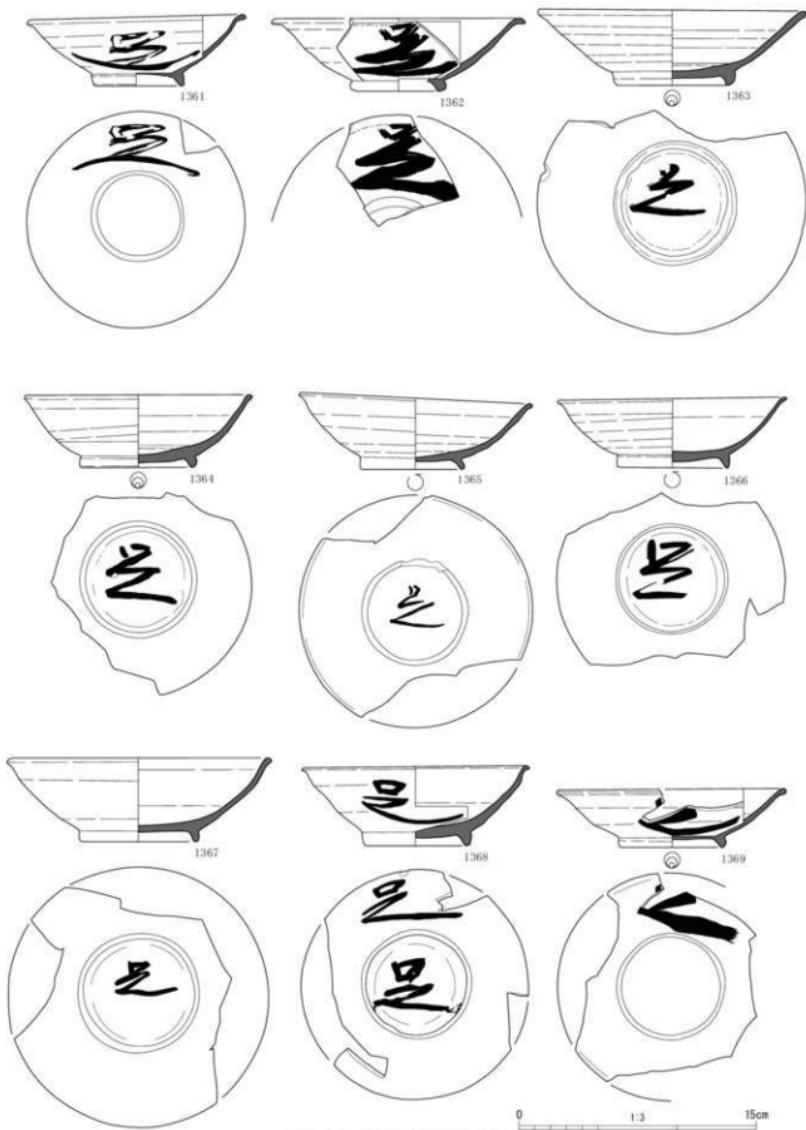


Fig. 281 IV層 出土遺物 (2)

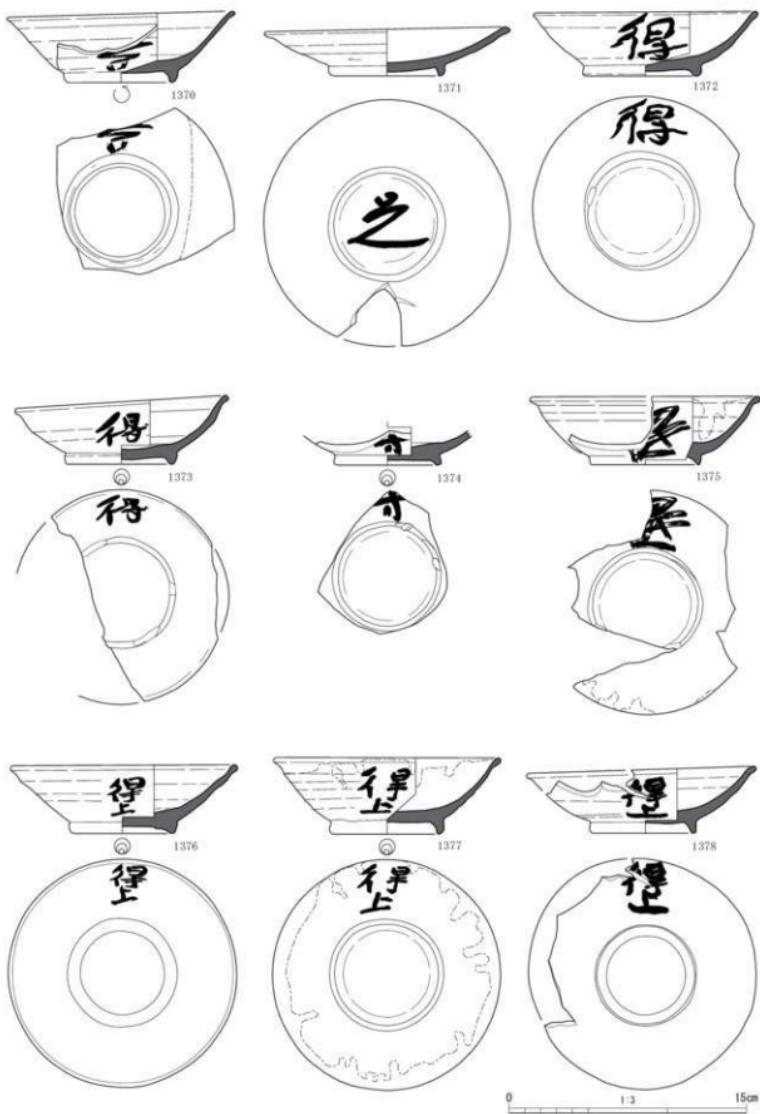


Fig. 282 IV層 出土遺物 (3)

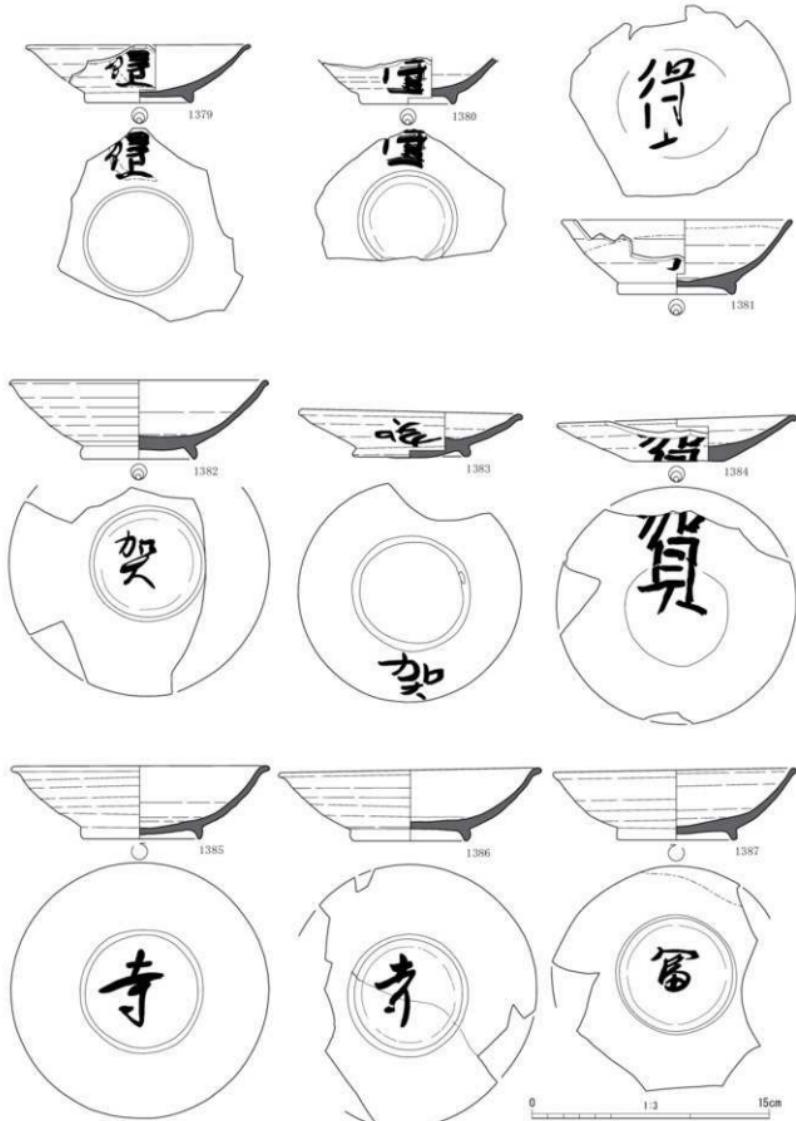


Fig. 283 IV層 出土遺物 (4)

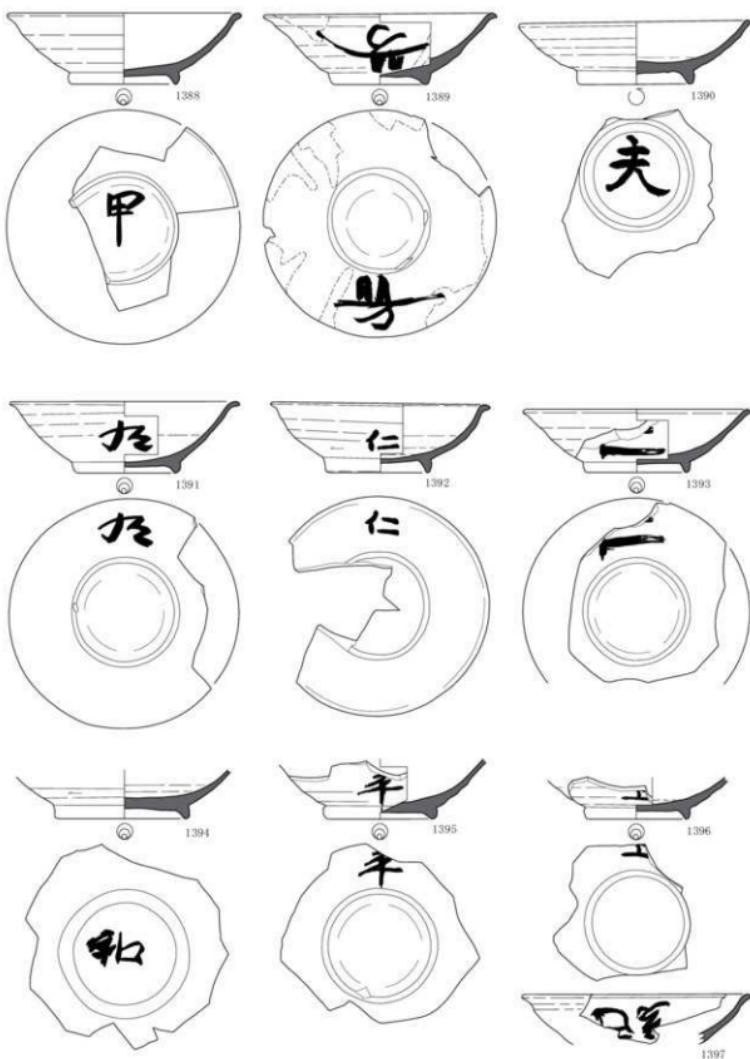


Fig. 284 IV層 出土遺物 (5)

6 伊場大溝IV層の調査

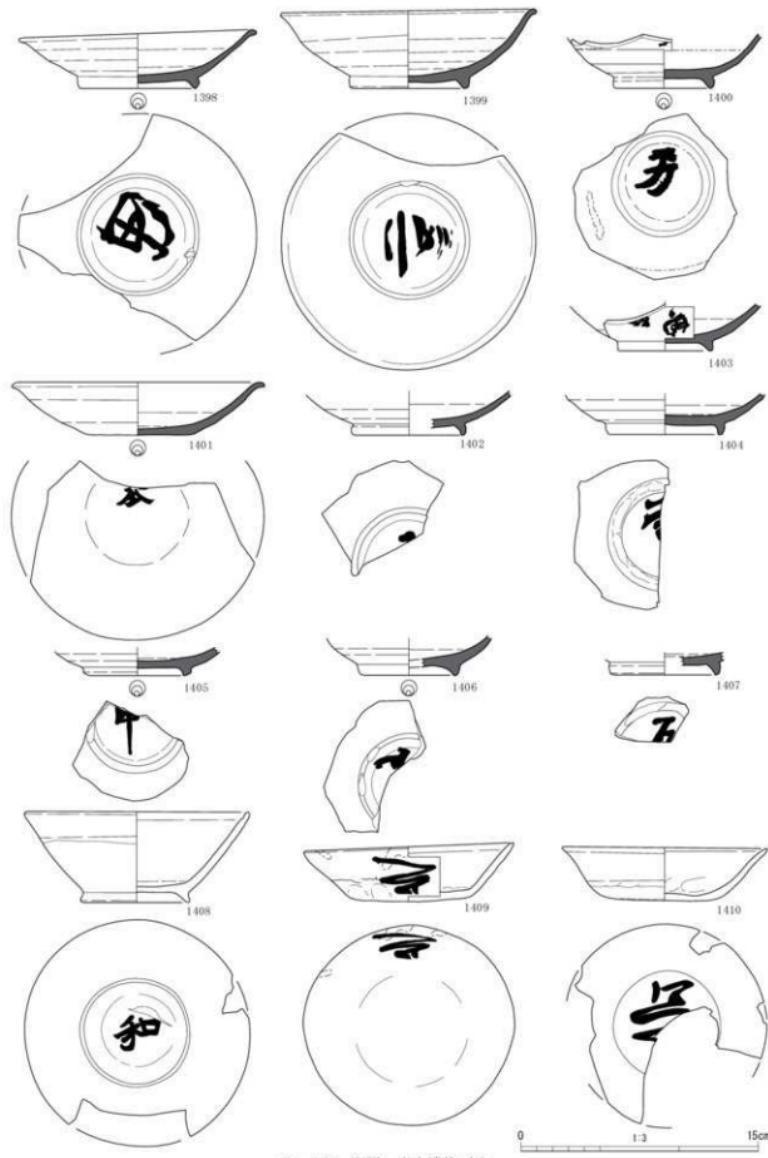


Fig. 285 IV層 出土遺物 (6)

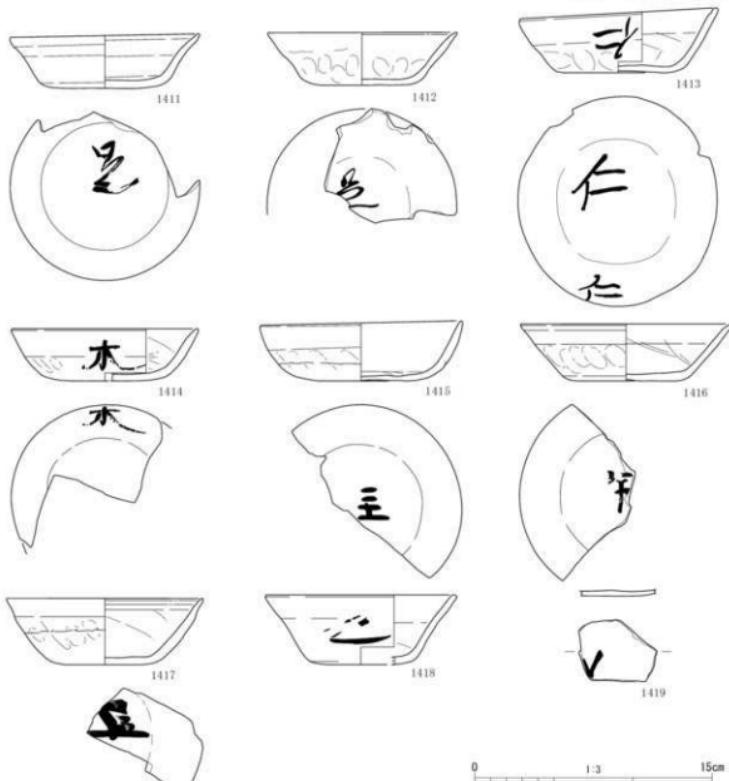


Fig. 286 IV層 出土遺物(7)

1570は骨製の筋錘車と考えられる。

木簡 (Fig. 295) IV層中より1点出土している。発見順で番号が付与されているため梶子22号(1571)とした。1571は上部が欠損している薄板材の両面に墨書が記されている。ほとんど文字の判読は困難であるが「嶋」と考えられる文字が確認される。

木製品 (Fig. 295～297) 1572～1596はIV層から出土した木製品である。器種は人形、船形、柄、曲物、加工板、加工棒、杭、建築部材等が出土している。

1572・1573は人形である。1572は墨痕が確認できるが描かれている内容については不明である。

1573は人面が記されている。眉、目、鼻、口のほか、墨痕が確認できるが内容については不明である。1574は舟形である。1575は馬形と考えられる。上部に2箇所、下部に1箇所抉りが確認される。1576は刀子の柄である。

1577是有孔加工板である。薄板材の上下部に穿孔が確認される。1578は上部に穿孔が確認で

6 伊場大溝IV層の調査

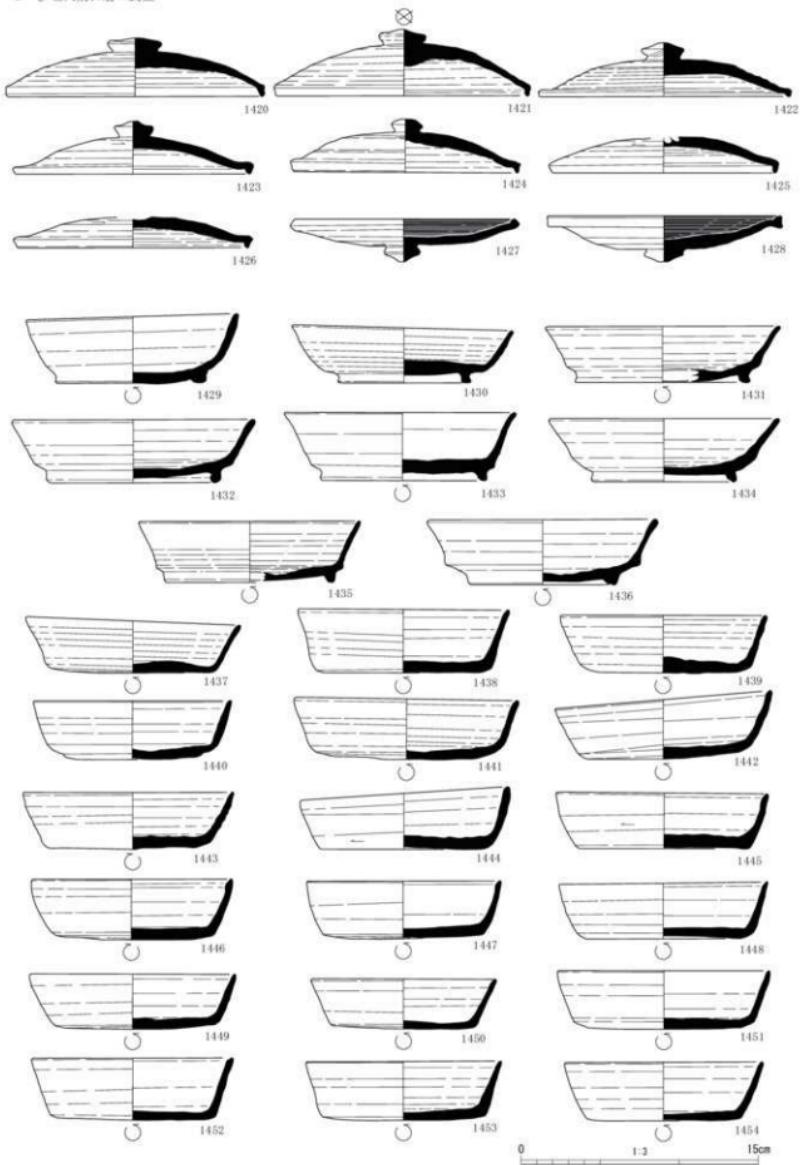


Fig. 287 IV層 出土遺物 (8)

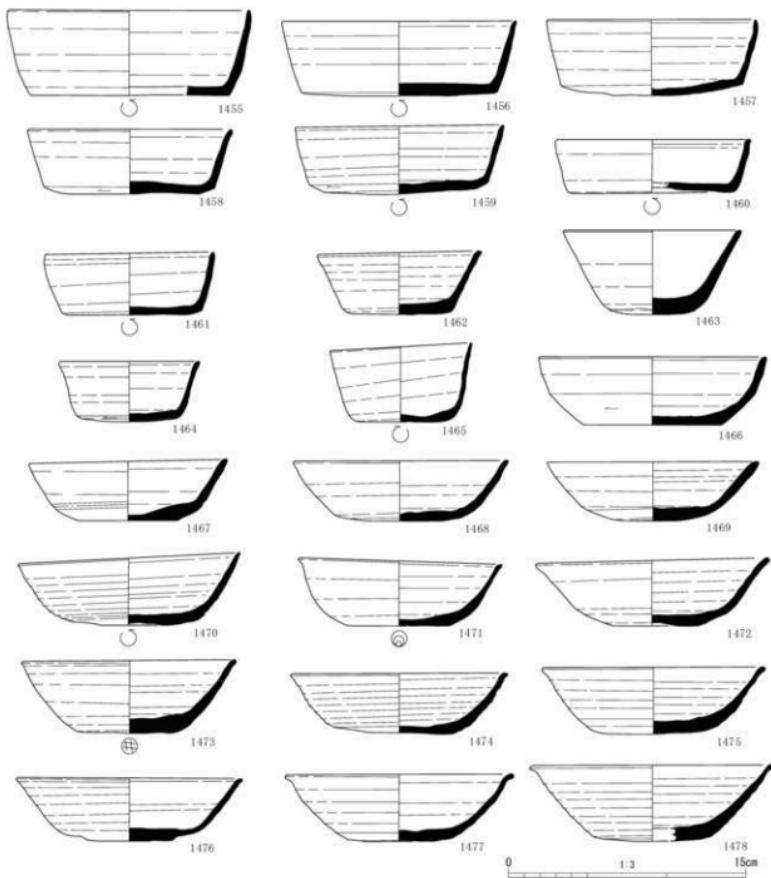


Fig. 288 IV層 出土遺物 (9)

き、用途は不明であるが、刷毛の柄のような形状である。1579・1580は板材に穿孔が確認される。1581はやや厚めの材に方形状の穿孔が確認できる。また、上部にU字状の抉りが削り出される。1582～1584は加工板である。1583は欠損により不明瞭であるが、平串状の形状であると考えられる。1584は断面形が台形状になるよう加工されている。1586～1588は曲物である。1589は挽物皿である。1593～1595は大型の曲物の一部である。1596は建築部材と考えられる。

(9) 小結

IV層ではSX01より大量の墨書き器が出土しており、木簡が4点と「足」が線刻された曲物が出

6 伊場大溝IV層の調査

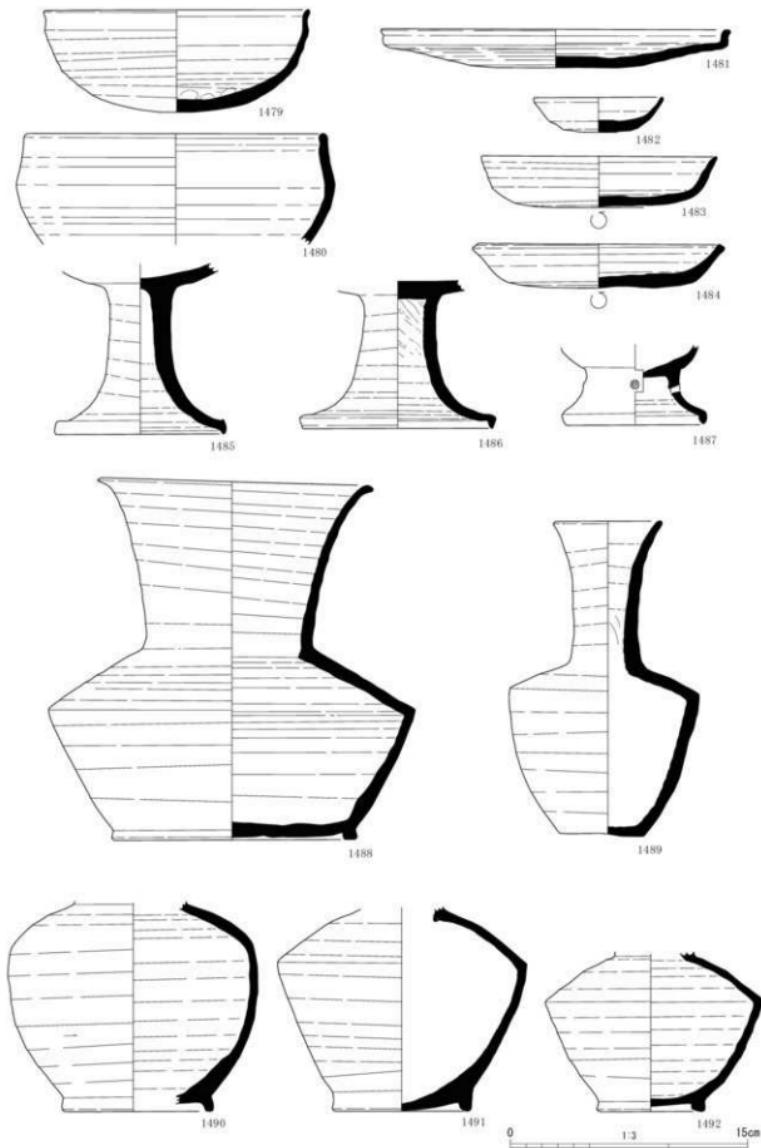


Fig. 289 IV層 出土遺物 (10)

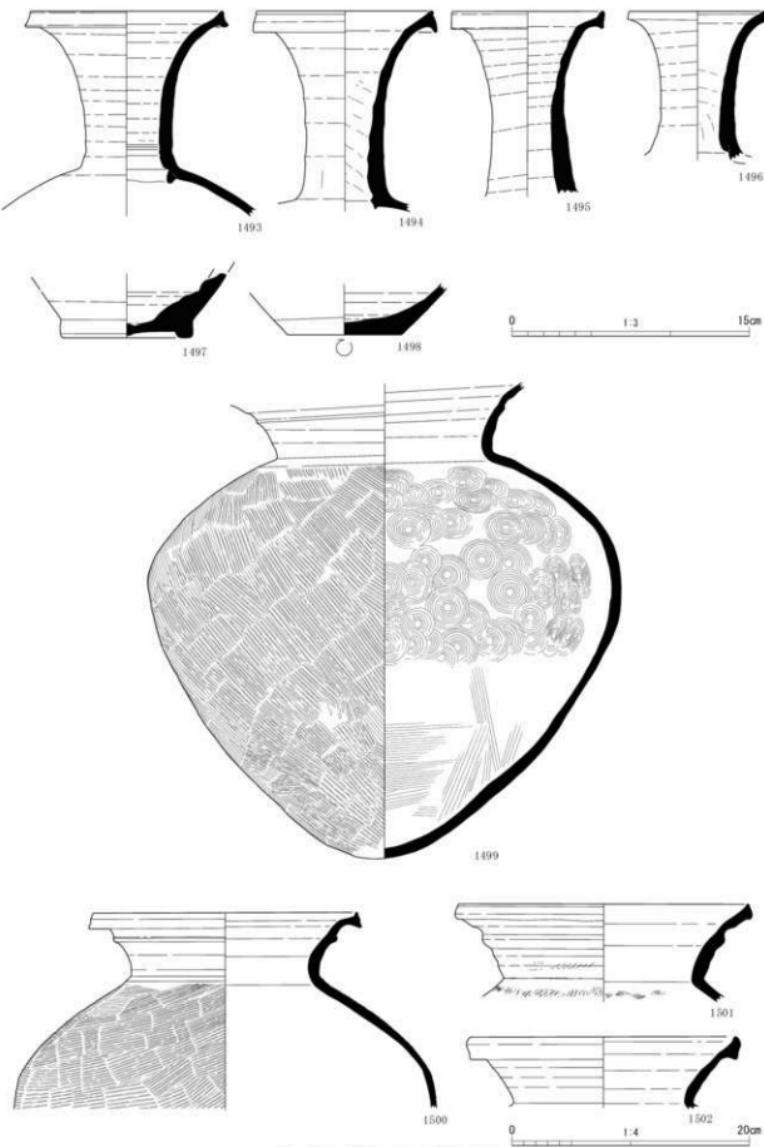


Fig. 290 IV層 出土遺物 (11)

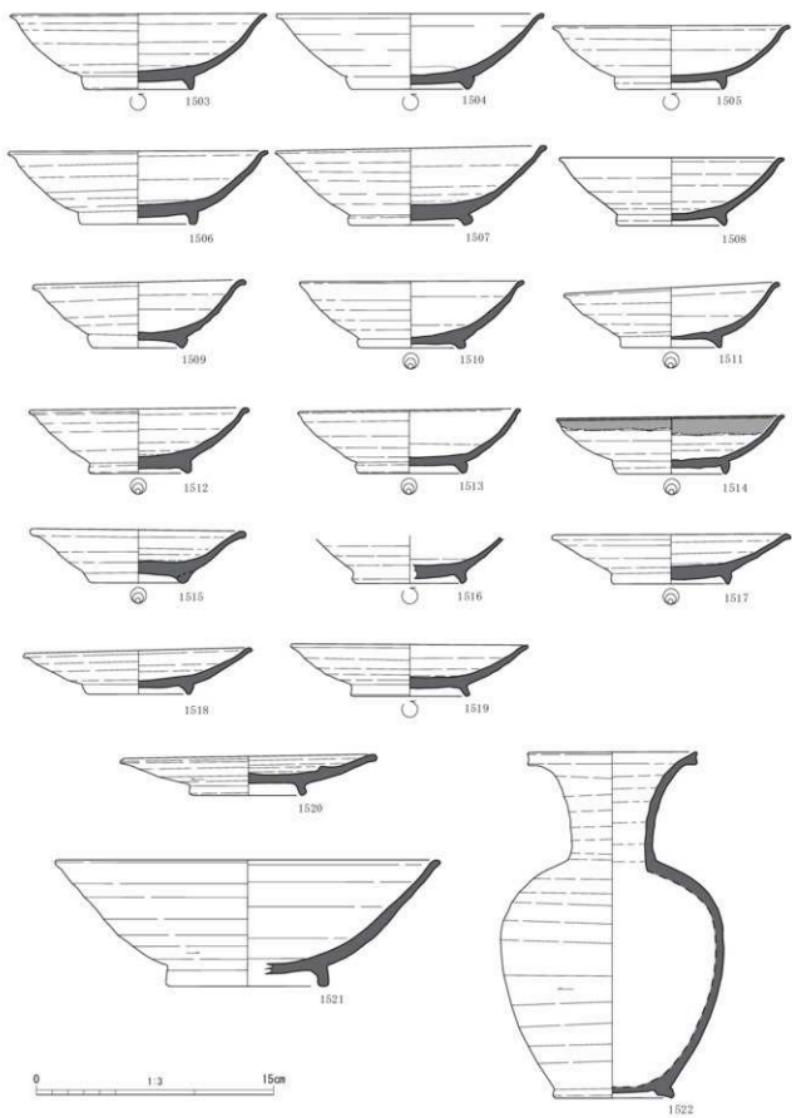


Fig. 291 IV層 出土遺物 (12)

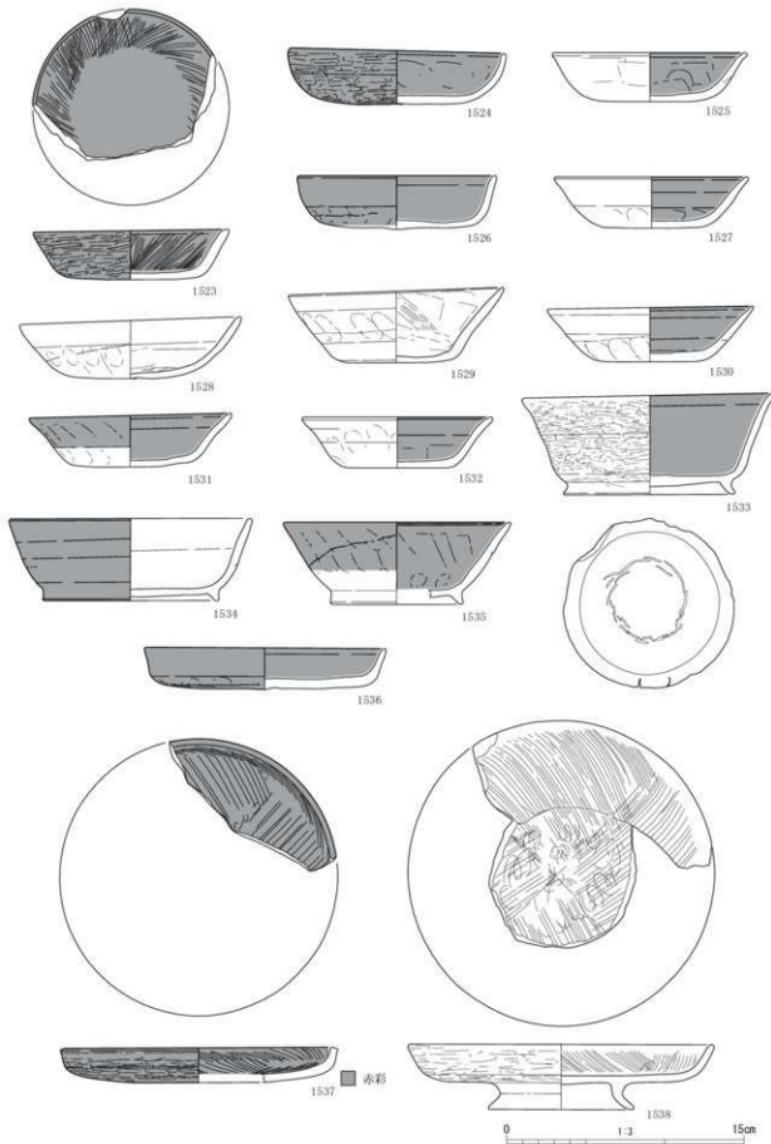


Fig. 292 IV層 出土遺物 (13)

6 伊場大溝IV層の調査

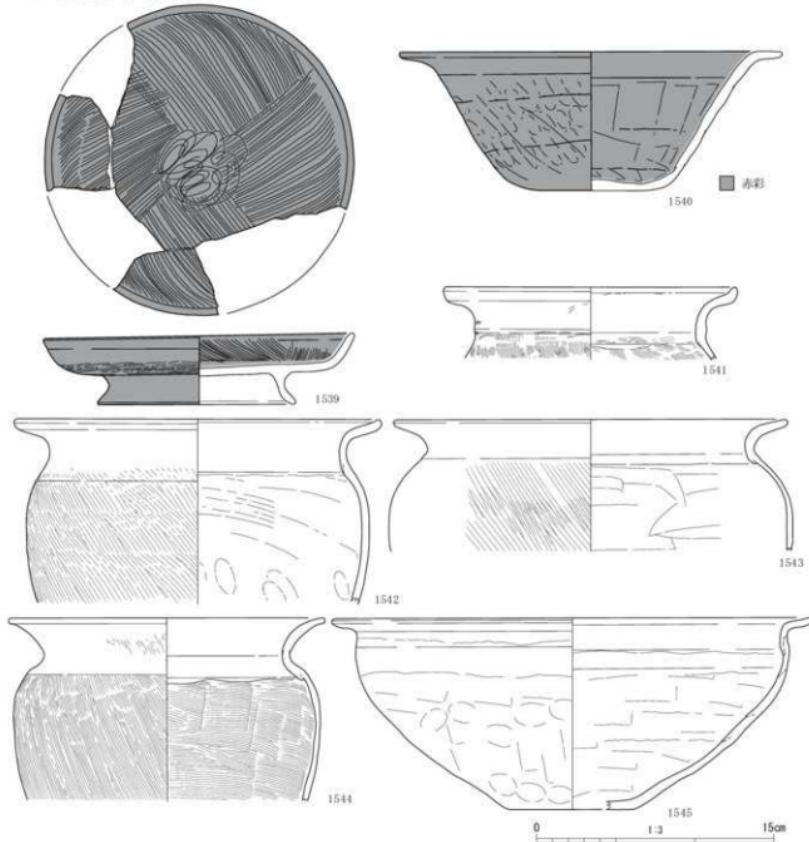


Fig. 293 IV層 出土遺物 (14)

土している。SX01に投棄された遺物は大半が灰釉陶器であり、須恵器が少ない傾向である。墨書き土器も灰釉陶器の割合が高い。灰釉陶器は9世紀代、特に9世紀後半の様相を示すことから、この時期に墨書き土器を集中して投棄していた可能性がある。SX01内の出土数をみると西部が最も遺物の密度が高く、東に向かうにつれ低くなることから投棄場所の中心はSX01西部付近、または調査区北西部外の可能性がある。しかしながら、本調査区西寄りで調査がなされた梶子19次調査では、IV層は一部のみ調査されたにとどまるため全容は不明である。ただし、本調査でSX01で吉祥句とみられる一文字書きの墨書き土器が大量に一括して出土していることや人面墨画など特殊な遺物が出土することから大溝南岸を中心に敷智郡家に関連する施設、またはSX01付近において祭祀が行われていたと推定される。

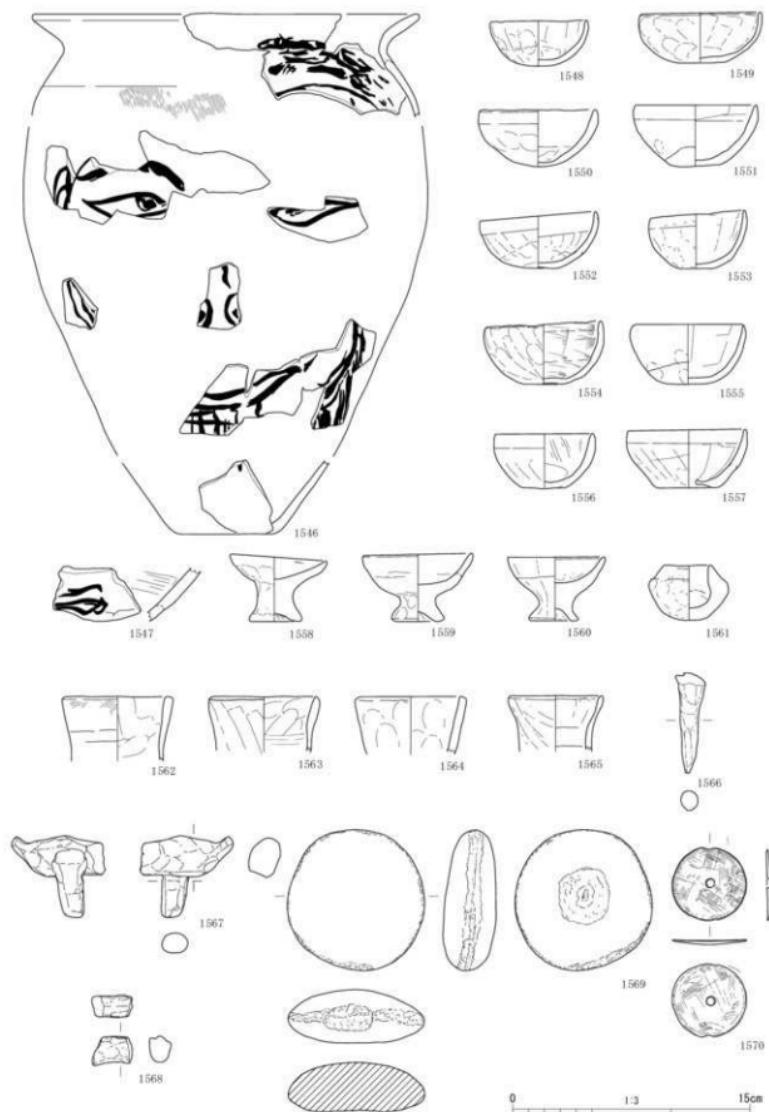


Fig. 294 IV層 出土遺物 (15)

6 伊場大溝IV層の調査

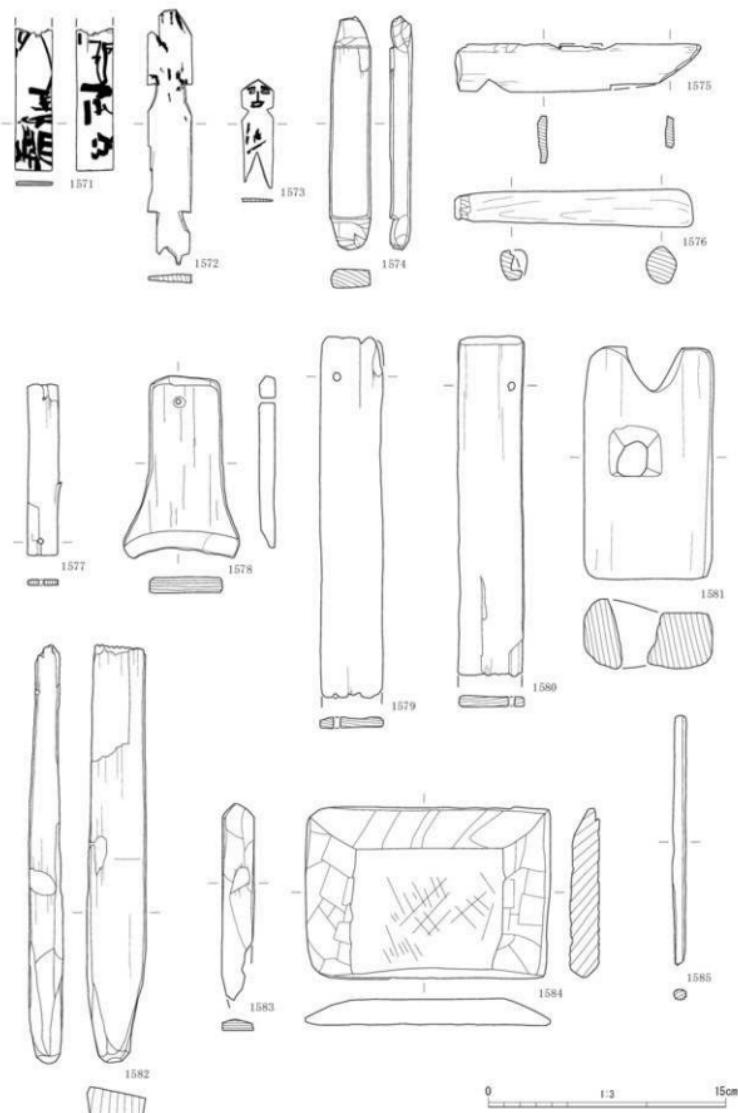


Fig. 295 IV層 出土遺物 (16)

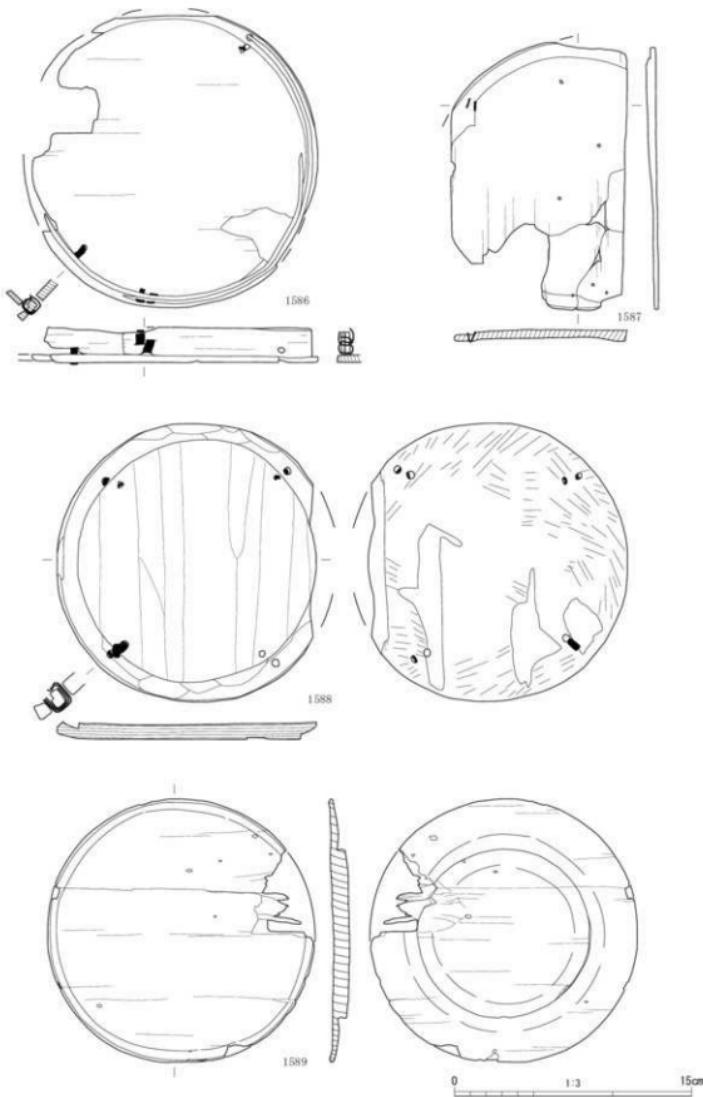


Fig. 296 IV層 出土遺物 (17)

6 伊場大溝IV層の調査

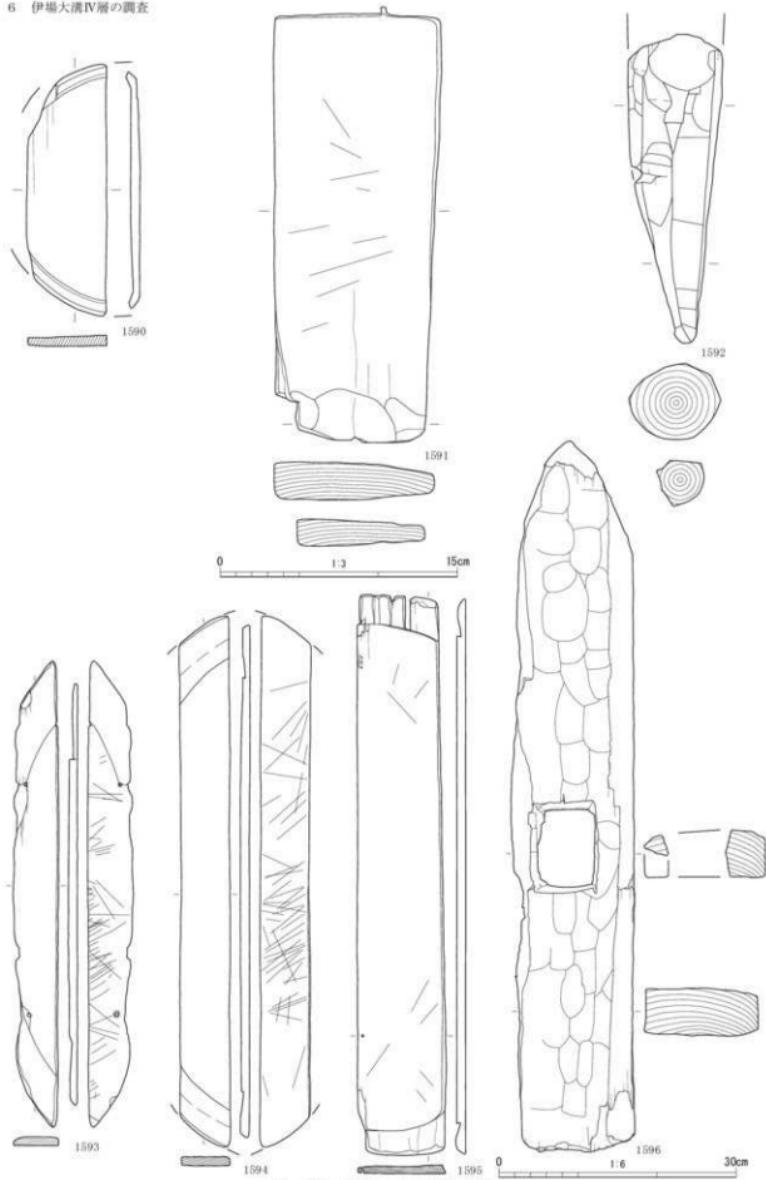


Fig. 297 IV層 出土遺物 (18)

7 伊場大溝III層の調査

(1) 概要

III層は、伊場大溝の最上層であり、主に中世に堆積が進んだ層とされている。堆積土は未分解の植物片を大量に含む褐色系粘質系シルトが主体である。この段階での大溝は幅、深さとともに著しく減少し、ほとんど水流のない川になっていたと考えられる。今回の調査では黒色を帯びた未分解の植物片など有機物を大量に含む褐色系粘質系シルト土の堆積とIV層の堆積の間に有機物を多く含む土の堆積を確認した。III層は、木簡や墨書き器など古代の遺物は出土するが、中世の遺物をほとんど内包しないことから、今回の調査では、13次調査で分離されているIII a層、III b層を一括してIII層として調査を行った。

(2) 伊場大溝の形状

III層の大溝は、IV層の大溝と比較して幅や流路の形状は変わらないものの、さらに埋没が進み、幅は約10m、深さは0.75～0.55mほどまで減少する。底面の標高は-0.1m前後となる。褐色系粘質系シルト土の堆積の状況から、植物が大量に繁茂する環境であったと推定される。

この頃には、大溝はほぼ埋没した状態となり、ほとんど水流のない湿地のような状態になっていたと考えられる。最終的に16世紀頃までは完全に埋没し、地上から姿を消したと推定される。なお、大溝III層と同様の堆積は、大溝本流の西側や南側まで広く堆積しており、梶子遺跡13次調査区でも同様の堆積を確認している。大溝の完全な埋没と時を同じくして、浜堤列間低地の広い範囲が湿地化していたと推定される。

(3) 遺物の出土状態

出土遺物の傾向 III層から出土する遺物は、IV層以下と比較すると極端に少ない。遺物の分布はIV・V層同様、大溝の南岸部付近に偏る傾向があるが顕著ではない。

III層の出土品は、遺物の時期や特徴などからみて、ほとんどの遺物がIV層中から水流により遊離、III層底部付近に位置したと推定される。位置的にIII層の出土品の多くはIV層SX01中にあったものが水流により移動した可能性が高い。灰釉陶器の碗に墨書きをしたものも、遺物の時期や特徴から当初はSX01にあったものと推定される。このほかIII層中からは数は少ないが、本来の時期に相当する13世紀代の輸入陶磁器や山皿など、中世の土器が出土した。

(4) III層出土遺物

1～10は当該時期以前の混入遺物と考えられる。11～15は、本来のIII層時期の出土遺物である。山皿と輸入陶磁器（青磁）のみである。

須恵器（Fig.300）1は有台坏身で底部が高台よりも突出するのが特徴的である。高台が形骸化する8世紀前半の湖西窯産か。2は風字硯。東遠江産と考えられる。平底で厚手の堅牢なつくりである。いずれもV層相当の混入遺物である。

土師器 (Fig. 300) 3は壺である。底部から口縁へと外反する。内面はミガキ調整。IV層相当の混入品である。

灰釉陶器 (Fig. 300) 灰釉陶器は7点が出土した。10を除きいずれも碗である。4は口縁部のみ、7・10は底部のみが遺存する。そのうち4～7には墨書が記されていた。4は下部の欠失、5は施釉で断定できないが、4・5は外側面に「得カ」の墨書が認められる。6は高台内と見込に「几吉力」の墨書が記されている。7は外側面に墨書が認められるが上部が欠失しているため判読はできない。底部は糸切。8は内外面にハケで施釉する。底部は糸切。9は焼成が軟質である。底部は回転ヘラケズリ。10は長頸壺の底部である。底部は糸切。これらの灰釉陶器は、いずれも形状や墨書の特徴がIV層SX01出土品と類似していることから、III層期の水流が下層であるIV層SX01を渡り浮遊した混入の可能性が高い。

中世の土器 (Fig. 300) 11～13は山皿である。概ね法量は、口径8.0 cm前後、器高2.0 cm前後である。11・12は底部糸切、13はヘラおこし。11は口縁部から内面に自然釉。13の内面には降灰が確認できる。11の底部には墨書が認められるが、判読はできない。14・15は貿易陶磁器の青磁碗である。ともに外面には錦蓮弁文が認められるが鮮明ではない。輸入陶磁器、中国宋代の龍泉窯産か。

その他の遺物 (Fig. 301) 本製品は12点図示した。16は細長い薄い板状の木製品。その形状から斎車の可能性がある。17は切り込みを有する薄い板状で馬形か鳥形の可能性がある。18・19は刻歯式の横櫛。ともに残存長約7 cm、幅約4 cm、厚さ約1 cmとなる。19の歯部はほとんどが欠失している。20は曲物底板の中央に円形の穴をあけ、何かに転用されている。21は挽物皿。残存口径15.5 cm、残存高3.4 cm、器厚0.3 cm。非常に薄く精緻なつくりである。内面見込に径6.5 cmの土器の高台痕痕が遺る。22は丸太を半截したような形状に四角い孔を穿つ。木鍤、部材または何かの未製品か。23は長方形の板材、3角を欠失する。径0.3 cm程の孔を3箇所穿つ。用途は不明である。24は端部を二股に加工した部材。端部のみが遺り、ほとんど欠失しているため、用途は不明である。25は細長い板状の加工材、両端を細く加工している。残存長は29.4 cm、厚さ2.4 cm。中央部は被熱で炭化している。26は棒状の加工材、両端を尖らす。長さ109.2 cm、径3.8 cm。27は杭状の先端部分。樹皮が遺る。

木製品の時期は不詳であるが、土器類の下層からの混入に従えば、IV・V層の混入品が多くを占めると考えられる。

(5) 小結

III層からの出土品は、下位のIV層に比べて極めて少ない。灰釉陶器は位置的にIV層SX01の出土品と類似しており、III層出土遺物のほとんどは下層のIV層中からの混入品と考えられる。木製品には横櫛や形代のような祭祀系のものがあり、下層のIV層中から水流によりIV層SX01を渡り遊離したと考えられ、混入の可能性が高い。

III層は、出土遺物（山皿、輸入陶磁器）から鎌倉時代（13世紀）には、ほぼ埋没した状態になり、完全に埋没した後は、ところどころが窪地状に湿地化となり、居住や田畠には適さない環境になっていたと考えられる。

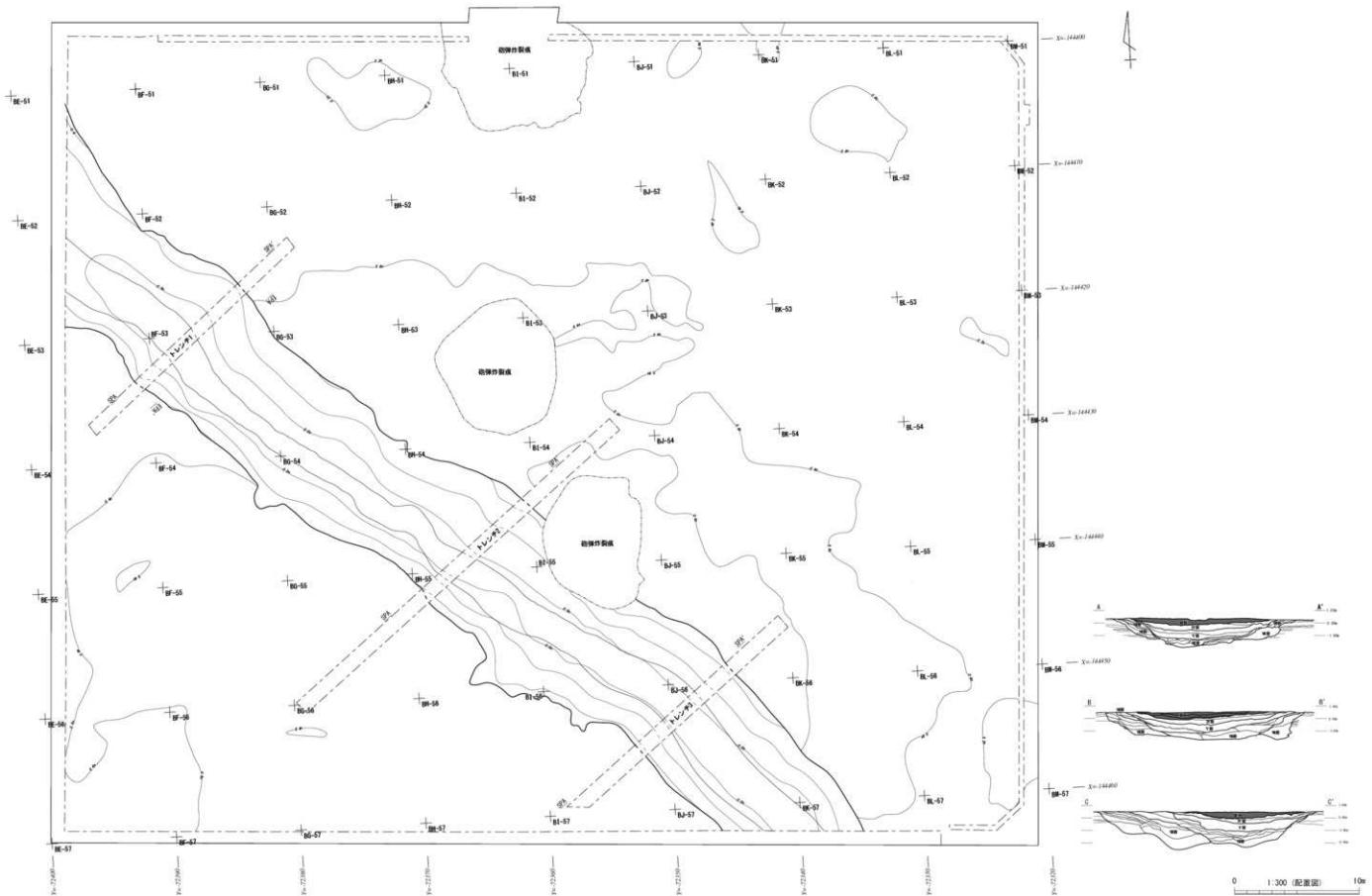


Fig. 298 D区 伊場大溝Ⅲ層

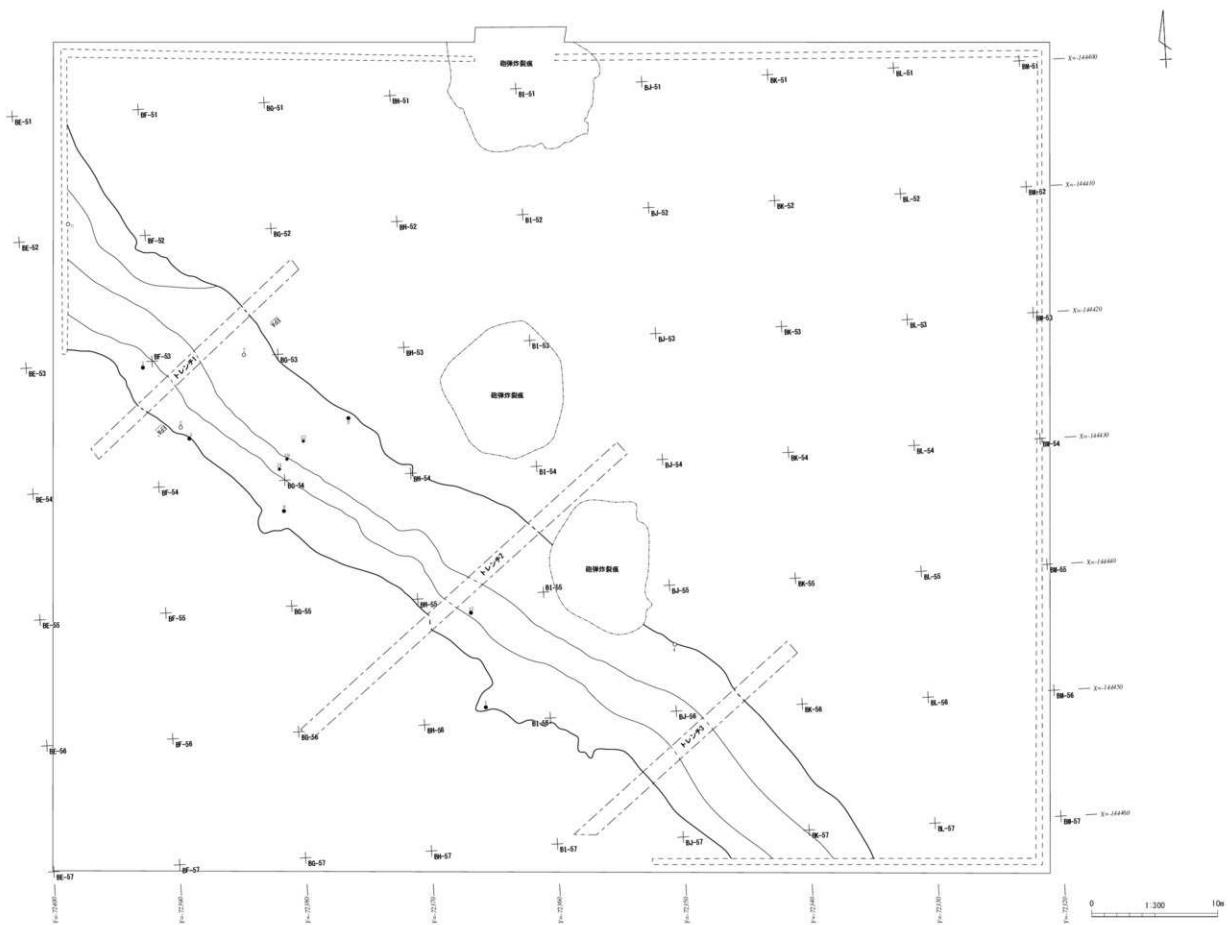


Fig. 299 D区 III層における遺物出土位置

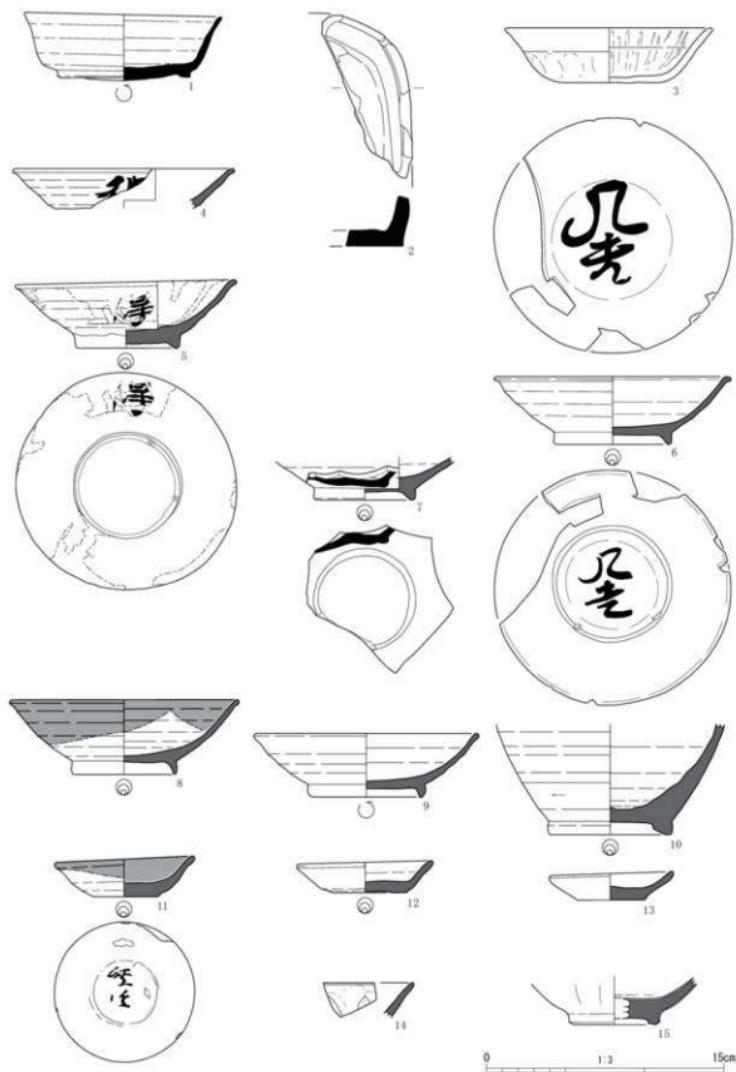


Fig. 300 III層 出土遺物 (1)

7 伊場大溝Ⅲ層の調査

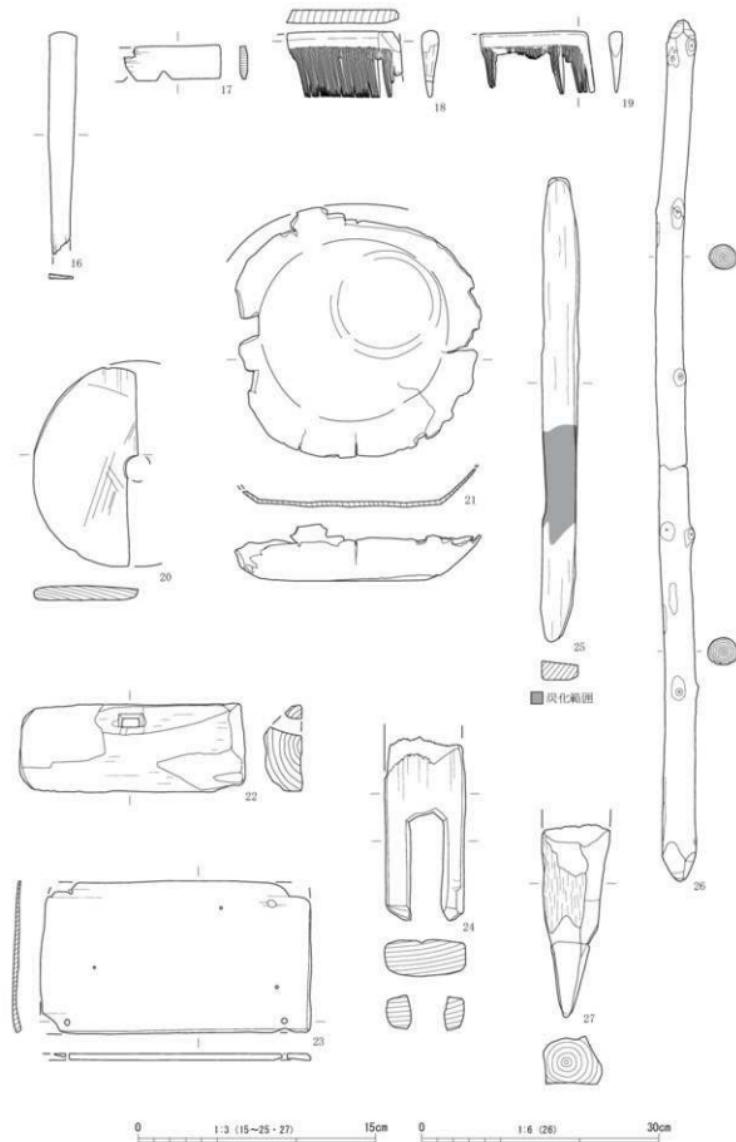


Fig. 301 Ⅲ層 出土遺物 (2)